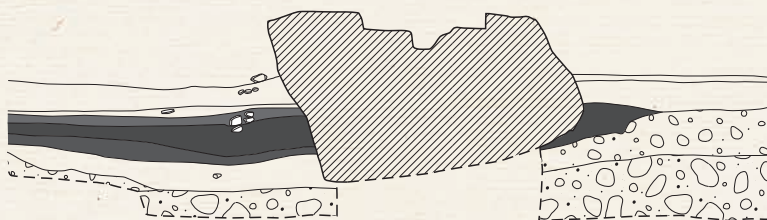


比江廃寺跡Ⅲ

平成6・7年度の確認調査報告書



Foundation stone for the central pillar of pagoda at the *Hie* abandoned temple

2007.2

高知県教育委員会
(助)高知県文化財団埋蔵文化財センター

比 江 廃 寺 跡 Ⅲ

平成6・7年度の確認調査報告書

2007.2

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高知県教育委員会では比江廃寺跡の範囲確定と伽藍配置確認に向け、昭和44年度、平成2年度に引き続き平成6・7年度に文化庁からの国庫補助を受け、確認調査に取り組んでまいりました。南国市教育委員会の調査と合わせると計5次に互る調査が実施されて来ました。

昭和44年度の調査では、国の史跡となっている塔心礎が原位置を保っていること、平成2年度の調査では多量の瓦が出土し、比江廃寺の瓦の様相解明に繋がる資料を得ることができました。そして、平成6・7年度の調査では塔跡の北側で礎石建物跡の一部が確認され、伽藍配置の再検討を促すこととなりました。また、寺域に関連も考慮される溝跡の確認など一定の成果を挙げることもできました。

一方、本報告書が調査実施から10年以上の歳月が経ってしまい、公表が今日に至ってしまったことなど反省しなければなりません。

何れにしましても、この成果が比江廃寺の実態解明の手掛かりとなり、且つ、文化財保護と研究の一助になれば幸いに存じます。

最後に、調査に際しご指導頂いた文化庁をはじめとしてご教示頂いた先生方、終始ご配慮下さった南国市教育委員会ならびに地権者の方々、そして調査にご協力下さった地元比江地区の皆様方に深く感謝の意を表し心よりお礼申し上げます。

平成19年2月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 川島 博海

例 言

1. 本書は、高知県教育委員会が平成6・7年度に文化庁から国庫補助を受け実施した比江廃寺跡の確認調査の報告書である。高知県教育委員会では、これまでに比江廃寺跡の発掘調査を昭和44年度と平成2年度の2度実施しており、今回の調査が3回目に当たる。よって、今回の発掘調査は『比江廃寺跡Ⅲ』の書名で報告する。
2. 比江廃寺跡は南国市比江に所在する白鳳期に創建されたと考えられる古代寺院跡で、塔心礎が遺存することから昭和9年1月22日に塔心礎が「比江廃寺塔跡」として国の史跡に指定されている。
3. 発掘調査は、高知県教育委員会文化財保護室社会教育主事松田知彦(現高知県立岡豊高等学校教頭)と(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第一班長山本哲也が担当し、現場の調査は山本が行った。
4. 整理作業並びに本書の執筆、遺物写真撮影、編集等については廣田佳久(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査課長兼企画調整班長)が行った。なお、現場写真は調査を行った山本が撮影したものを使用している。
5. 測量は、高知県教育委員会が昭和58年度に設置した日本測地系(旧日本測地系)の公共座標第Ⅳ系の基準点を利用している。方位Nは日本座標系のGNであり、塔心礎の真北方向角は $-0^{\circ}05'06''$ である。
6. 遺構については、ST(竪穴住居跡)、SB(建物跡)、SA(塀跡)、SK(土坑)、P(ピット)の略号を併用し、番号は通し番号である。掲載している平面図等の縮尺はそれぞれに記している。
7. 遺物は原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。また、遺物番号は遺構番号と同じように通し番号とし、本文、挿図、図版の番号と一致している。
なお、報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用した素焼土器の総称として使用し、土師器(左手手法)とは峻別している。この区分は、製作技法によるもので時期区分ではなく、両者は併存する。
8. 整理作業は下記の方々に協力を頂き、地形・地質について辻康男氏に助言を頂いた。記して感謝申し上げます。
中西純子、岩貞泰代、松田美香、黒岩佳子、岡宗真紀、川添明美
9. 出土遺物は、平成6年度分が「94-20NH」、平成7年度分が「95-14NH」と註記して、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 遺跡の地理的環境	3
2. 遺跡の歴史的環境	3

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法	5
2. 各年度の調査	6
(1) 平成6年度の調査	6
① 1区	6
② 2区	7
③ 3区	7
④ 4区	7
(2) 平成7年度の調査	7
① 5区	7
② 6区	8
③ 7区	8
④ 8区	8
⑤ 9区	8
⑥ 10区	8

第Ⅳ章 遺構と遺物

1. 塔跡東部	9
(1) 1区 - 2～4	9
① 弥生時代	9
② 古代	10
③ 中世	23
(2) 1区 - 5	23
2. 塔跡	23
3. 塔跡西部	25

挿図目次

(1) 8区.....	25
① 古代.....	25
② 中世.....	28
③ その他の遺構.....	29
(2) 9区.....	29
① 検出遺構.....	29
② その他の遺構.....	29
(3) 10区.....	29
① 検出遺構.....	29
② その他の遺構.....	30

第V章 考察

1. 伽藍配置.....	31
2. 寺域.....	32
3. 塔心礎と塔跡.....	32
4. 遺物－土師質土器と瓦について－.....	33
5. 性格と存続時期.....	35
6. その他の遺構と遺物.....	36
7. おわりに.....	36

挿図目次

図 1 比江廃寺跡位置図.....	1
図 2 比江廃寺跡周辺の遺跡(S=1/25,000).....	3
図 3 調査区設定図(S=1/1,000).....	5
図 4 1区－4東壁セクション.....	6
図 5 1区出土遺物実測図1.....	6
図 6 1区出土遺物実測図2.....	7
図 7 3・8・10区出土遺物実測図.....	7
図 8 ST－1・2出土遺物実測図.....	9
図 9 1区－2南壁セクション..... <input checked="" type="checkbox"/>	10
図10 SD－2出土遺物実測図 1.....	11
図11 SD－2出土遺物実測図 2.....	11
図12 SD－2出土遺物実測図 3.....	12
図13 SD－2出土遺物実測図 4.....	12

図14	SD-2出土遺物実測図 5	13
図15	SD-2出土遺物実測図 6	15
図16	SD-2出土遺物実測図 7	17
図17	SD-2出土遺物実測図 8	18
図18	SD-2出土遺物実測図 9	19
図19	SD-2出土遺物実測図10	20
図20	SD-2出土遺物実測図11	21
図21	SD-2出土遺物実測図12	22
図22	SD-3	22
図23	SD-3出土遺物実測図	22
図24	ピット出土遺物実測図	23
図25	1区-5遺構平面図	23
図26	塔心礎東トレンチセクション	24
図27	塔心礎西トレンチセクション	24
図28	塔心礎版築土出土遺物実測図	25
図29	SB-1	26
図30	SB-2	26
図31	8区出土遺物実測図	28
図32	比江廃寺跡・その他寺院跡出土軒丸瓦	34
図33	比江廃寺跡出土軒平瓦	35
図34	昭和44年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)	37
図35	平成3年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)	37
図36	平成16年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)	37

表目次

表1	土師質土器(皿)計測表	14
表2	土師質土器(杯)計測表	16

図版目次

図版1	比江廃寺跡・土佐国府跡・土佐国分寺周 辺航空写真(「国土画像情報(カラー空中写真) 国土交通省」)	図版3	1区-2~4 遺構完掘状態(南より) 1区-4 遺構完掘状態(北より)
図版2	1区-2・3 遺構検出状態(北より) 1区-4 遺構検出状態(北より)	図版4	1区-2 SD-2検出状態(南より) 1区-2 SD-2完掘状態(南より)
		図版5	1区-2 SD-2遺物出土状態(南東より)

図版目次

- 1区-2 SD-2遺物出土状態(北より)
- 図版6 1区-4 ST-1・2, SD-3完掘状態(西より)
- 1区-4 SD-3遺物出土状態(西より)
- 図版7 1区-5 遺構検出状態(西より)
- 5区 完掘状態(西より)
- 図版8 6区 完掘状態(南より)
- 7区 塔心礎(南東より)
- 図版9 7区 東トレンチ(南東より)
- 7区 東トレンチセクション1(南東より)
- 図版10 7区 東トレンチセクション2(南より)
- 7区 東トレンチセクション3(南より)
- 図版11 7区 拡張区(南西より)
- 7区 南トレンチ(南西より)
- 図版12 7区 西トレンチ1(北より)
- 7区 西トレンチ2(北東より)
- 図版13 8区 遺構検出状態(南より)
- 8区 遺構完掘状態(南より)
- 図版14 8区 根石検出状態(東より)
- 8区 壺地業検出状態(東より)
- 図版15 8区 SB-1(北隅から1間目)壺地業セクション(東より)
- 8区 SK-1遺物出土状態(東より)
- 図版16 9区 全景(北より)
- 10区 遺構検出状態(東より)
- 図版17 軒丸瓦
- 丸瓦
- 図版18 軒平瓦
- 平瓦
- 図版19 土師器(甕)
- 土師器(羽釜)
- 図版20 須恵器(円面硯)
- 須恵器(円面硯)
- 図版21 丸瓦, 平瓦
- 図版22 弥生土器(支脚), 土師器(小型丸底埴), 須恵器(双耳壺・杯蓋), 瓦(軒丸瓦・鬼瓦)
- 図版23 備前焼(播鉢), 土製品(土錘), 瓦質土器(鍋), 緑釉陶器(椀), 弥生土器(鉢・壺・甕)
- 図版24 弥生土器(鉢), 土師器(器台・椀・高杯・甕), 瓦(軒丸瓦), 須恵器(短頸壺), 緑釉陶器(椀)
- 図版25 土師器(甕・羽釜・高杯), 須恵器(甗)
- 図版26 土師質土器(羽釜・皿), 弥生土器(鉢), 円筒埴輪, 須恵器(杯身・杯)
- 図版27 土師質土器(皿・杯)
- 図版28 土師質土器(杯)
- 図版29 土師質土器(杯)
- 図版30 土師質土器(杯・椀), 黒色土器(椀), 須恵器(杯身), 石製品(石鏃)

付図目次

- 付図1 1区-2~4遺構平面図
- 付図2 7区(塔跡)遺構平面図
- 付図3 8区遺構平面図
- 付図4 9・10区検出遺構平面図

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

比江廃寺跡は国分川右岸の南国市比江に所在する白鳳期に創建された古代寺院跡であり、土佐国最大の塔心礎が今日に伝えられる。高知市秦泉寺廃寺とともに土佐国の寺院建立を研究する上で欠くことのできない寺院跡でもある。

唯一地上に往にし方の面影を伝える塔心礎とその周囲が昭和9年1月22日に「比江廃寺塔跡」として国の史跡に指定され、昭和49年度には南国市によって史跡指定地の公有地化が行われている。

一方、調査はこれまでに昭和44年、平成元年、平成2年の3度行われている。昭和44年には塔心礎周囲の調査が行われ、塔心礎が原位置を保っていることが確認された。平成元年には、南国市教育委員会が塔跡東隣の新城東製紙株式会社工場跡地の再開発事業計画に伴う事前の確認調査を行い、古墳時代とするピット、古代の集石2カ所と瓦溜1カ所、中世とする南北溝跡1条を検出している。この結果を受け、翌平成2年度には県教育委員会が発掘調査を実施している。この調査では、二次堆積とみられるものの軒丸瓦と軒平瓦を含む多量の瓦類が出土し、寺跡の変遷を検討し得る資料となっている。

しかし、38尺四方の塔基壇を有する法隆寺式伽藍配置と推測されるものの考古学的に立証されおらず、さらにその性格についても豪族の氏寺として建立され、国府付属寺院(国府寺)や国分尼寺に転用されたと推測されるなどその実体については解明すべき課題も多く、発掘調査による資料の蓄積が不可欠となっている。また、周辺部の再開発も懸念され、伽藍配置確認とその性格の把握が急務となっていた。

このような状況を受けて、今後の史跡の保存措置を講ずるための基礎資料を得る目的で平成6年度と平成7年度の二カ年に互って国庫補助を受け確認調査を実施することとなった。

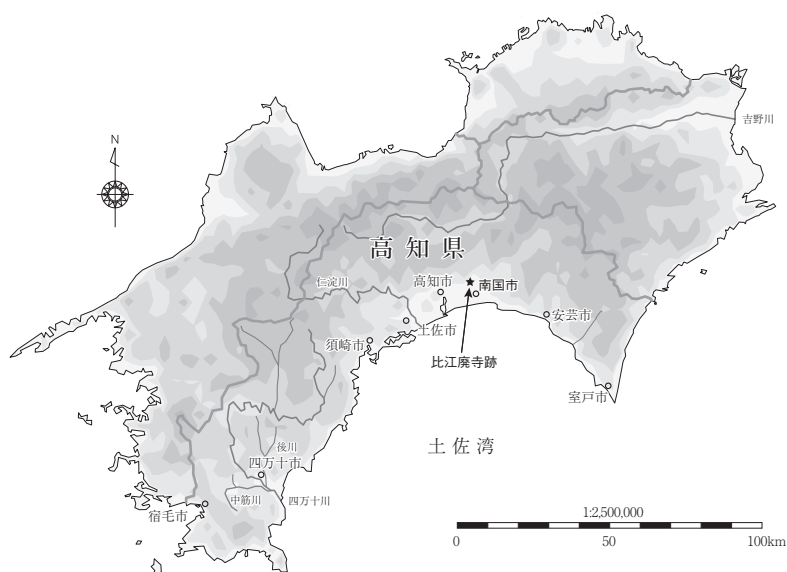


図1 比江廃寺跡位置図

2. 調査の経過

2. 調査の経過

確認調査は、平成6年度が国の史跡となっている塔心礎から東側、平成7年度が塔心礎とその西側を含む周辺部を調査対象とし、全体で調査区を10ヵ所に設定した。

まず、平成6年度は1～4区を対象とし、1区で遺構が検出された1～2～4区について調査区を拡張し、遺構の拡がりを確認した。1～5区についても調査区を一部拡張して調査を行った。他の調査区では攪乱や削平が著しく、明瞭な遺構は検出されていない。調査期間は平成7年1月9日～3月10日で、調査面積は340㎡であった。

平成7年度は5～10区を対象とした。中でもこれまで未調査となっていた塔心礎の西側の調査は伽藍配置解明に繋がる資料の出土が期待された。塔北隣の5区と東側の6区は攪乱と削平が著しく、明確な遺構は検出されなかったものの、8区からは初めて礎石建物跡を確認することができ、伽藍配置の再考を促す資料となった。9・10区からも遺構は検出されているが、比江廃寺に直接関係するものは確認されていない。そして、7区とした塔心礎部分では以前の調査と同じく、塔心礎が原位置を保っていることと版築を確認し、さらにその版築土から塔の建立時期を推測できる資料が出土した。調査は平成7年7月24日～9月7日と平成7年11月6日～平成8年2月23日の二回に分けて行い、最終的な調査面積は1,250㎡であった。

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 遺跡の地理的環境

この項目については、昭和44年度の確認調査の際に秀逸な報告(西1970)がなされており、ほぼそれが踏襲される。まず、比江廃寺跡は土佐国衙跡の北東端部、鬼門に位置し、国分川右岸の中位下段丘先端部に立地する。この中位下段丘は、北側山腹の比江廃寺とは約10mの比高差に面を持つ中位上段丘を削って更新世に形成された浸食段丘であり、この中位下段丘から一段下がって完新世に形成された沖積面が広がる。この沖積面は昭和44年当時未調査であったが、昭和56年度から土佐国衙跡の発掘調査が行われ、その状況が判明した。この沖積面は二つの地形面に分かれ、相対的に高位の面は自然堤防と後背湿地堆積物で構成されており国衙関連を中心に古墳時代から中世までの遺構が多数検出されている。この後背湿地には黒ボクの堆積が確認されており、黒ボクが比較的厚く堆積する箇所には直下でアカホヤの堆積も認められる。このことからこの面は少なくとも縄文早期後半以降、河川氾濫の影響はほとんどなく、非常に安定した土地条件の場所であったことが窺える。一方、この面より一段低くなった面は国分川の氾濫原となっており、その境では国府域を区画するとみられる溝跡の一部が検出されている。この氾濫原の離水時期については現在のところ確定していないが、比較的新しい河道痕跡も認められる。

2. 遺跡の歴史的環境

このような地理的環境にある比江地区は、古くは弥生時代前期末の遺物(高知県1991)も出土しているが、遺構では弥生時代後期後半の住居跡が最も古く、それ以降空白時期があるものの居住地として人間の痕跡を看取することができる。

現在のところ、弥生時代後期後半の遺構は前述の中位段丘上を中心に営まれ、古墳時代前期の遺構は県内の状況と同じく希薄であるものの後期には再び集落が形成される。この時期は高知平野に面した丘陵部で古墳が盛んに築造される時期でもある。

古墳の築造が終焉する7世紀後半頃には県内の先駆けとなる寺院(比江廃寺)が中位段丘上に建立され、8世紀前半には土佐国府が設置されたものとみられる。一方、西方約700mには土佐国分寺の造営も行われ始めたと考えられ、この地は土佐の中心地としての様相を整え始める。確認されている遺構から土佐国衙は8世紀後半から9世紀前半に最大の繁栄期を迎えたものと思われる。しかし、9世紀後半からは徐々にではあるが遺構数の減少がみられ、衰退傾向となる。比江廃寺では10世紀前半を境にその様相を異にする。

12世紀中頃からは比江地区南部を中心に再び遺構数の増加がみられ、ホノギに残る「府中」などからみて守護所の設置も考慮される。それも14世紀末に細川氏の一族である細川頼益が土佐へ入国し、



図2 比江廃寺跡周辺の遺跡(S=1/25,000)

2. 遺跡の歴史的環境

香美郡田村庄(現南国市田村)に居館を構え、守護領国制を展開するに至り、古代から続いた土佐の中心地としての栄華は終焉し、一集落として存続して行くことになる。

参考文献

西和彦 1970「Ⅲ 寺院付近の地形・地質」『高知県比江廃寺塔跡』－高知県文化財調査報告書第16集－ 高知県教育委員会

高知県教育委員会 1991『比江廃寺跡発掘調査概報』－高知県文化財調査報告書第33集－

第三章 調査の概要

1. 調査の方法

比江廃寺の範囲確認を第1目標として、これまで未調査であった部分を中心に調査区を設定した。調査区は平成6年度に1～4区、平成7年度に5～10区の10ヵ所を設定して行った。

調査は、原則として遺構の検出までで止め、必要に応じて調査区の拡張と遺構の掘削を行うこととした。測量は高知県教育委員会が土佐国衛跡の発掘調査のために昭和58年度に設置した日本測地系(旧日本測地系)の公共座標第IV系の基準点を利用して行った。なお、塔心礎の座標は $X = 66,545.2$ 、 $Y = 14,230.5$ (世界測地系： $X = 66,924.7$ 、 $Y = 13,988.5$ 、真北方向角： $-0^{\circ} 05' 00''$)である。

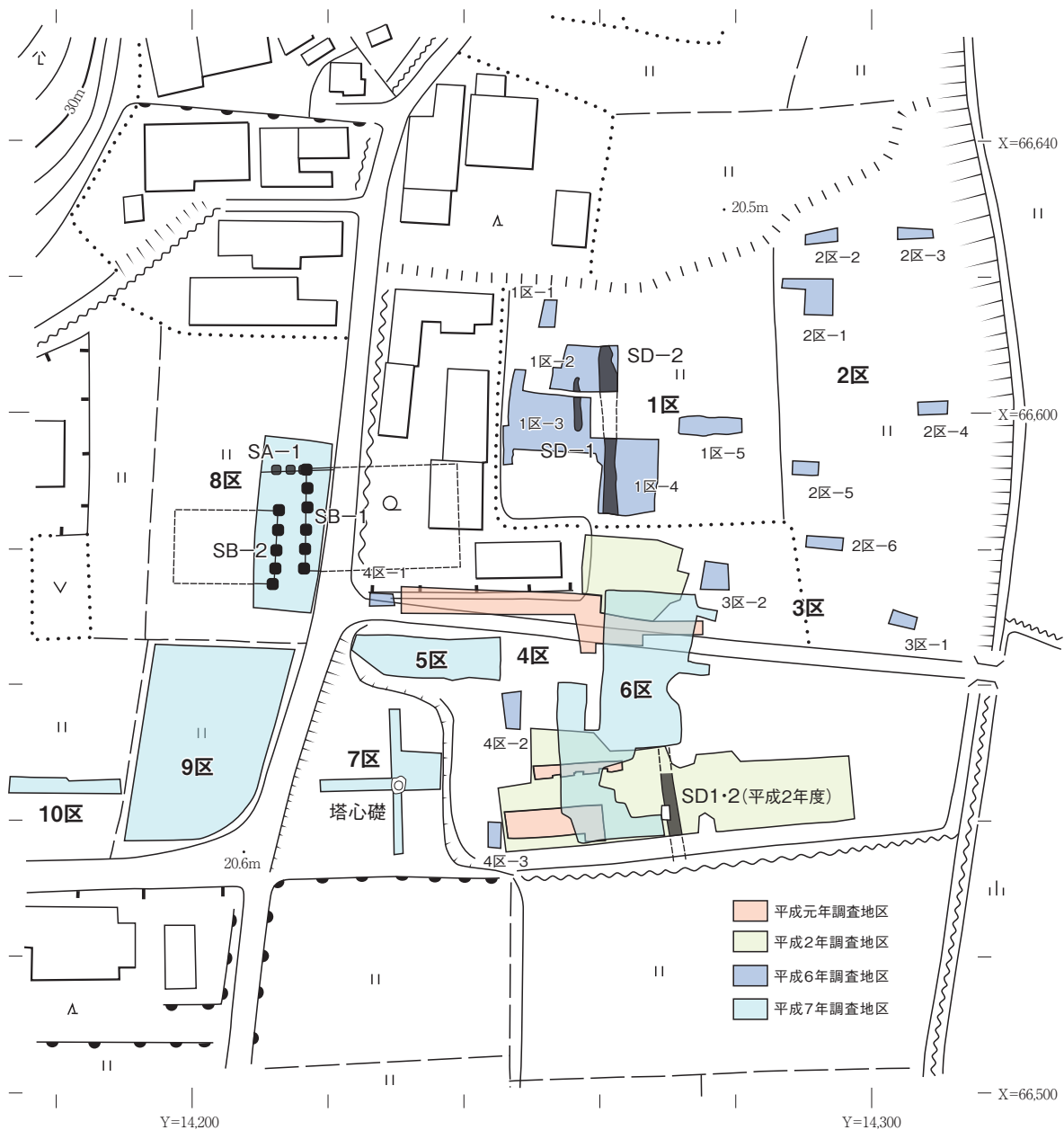


図3 調査区設定図(S=1/1,000)

2. 各年度の調査

2. 各年度の調査

平成6・7年度の2カ年に互って確認調査を実施した。主な遺構には平成6年度1区で検出した南北の溝跡と平成7年度8区で検出した礎石建物と考えられる礎石の掘り込み地業跡(壺地業跡)、遺物には前述の平成6年度に調査した南北溝から出土した灯明皿・緑釉陶器・軒丸瓦、平成7年度8区の井戸跡から出土した円面硯がある。復元できた遺物では、1区の南北溝から出土した遺物が全体の約93%を占める。

(1) 平成6年度の調査

塔心礎の北東部を中心に調査区を設定した。16カ所にトレンチを設定し、1区で遺構が検出され、調査区を拡張した。

① 1区

塔心礎の北東部に設定した調査区で、5カ所にトレンチを設定した。この内、1区-2~5で遺構が確認され、調査区を拡張した。特に、1区-2~4では南北に延びる溝跡が検出され、それに沿って調査区の拡張を行っている。なお、SD-1の西側では、遺構が全く検出されていない。

遺構が検出されたのは、礫混じりのにぶい黄橙色シルト層(第VI層)上面であり、上層には遺物を包含する黒褐色粘土質シルト層(第V層)そして旧表土、客土、床土、表土層の順に堆積していた。なお、第III層出土遺物のうち6点(図5・6-1~6)が復元図示できた。

遺構が検出されたのは、礫混じりのにぶい黄橙色シルト層(第VI層)上面であり、上層には遺物を包含する黒褐色粘土質シルト層(第V層)そして旧表土、客土、床土、表土層の順に堆積していた。なお、第III層出土遺物のうち6点(図5・6-1~6)が復元図示できた。

出土遺物

須恵器(図5-1)

甕の頸部から肩部の破片で、肩部外面には平行の叩き、内面には同心円文の叩きが施される。頸部はヨコナデ調整で、外面にはハダ荒れがみられる。

備前焼(図5-2)

播鉢の口縁部の破片とみられるもので、口縁部は下方に肥厚している。

青磁(図5-3)

碗で、底部約2/3が残存し、外面に細蓮弁文の痕跡が残る。釉は内面から高台外面にかけて施され、緑灰色を呈する。畳付から内側は露胎となる。

土製品(図6-4~6)

いずれも土錘で、4・5は円筒形、6は紡錘形を呈する。重さは4が19.7g、5が20.2g、6が4.0gを量る。

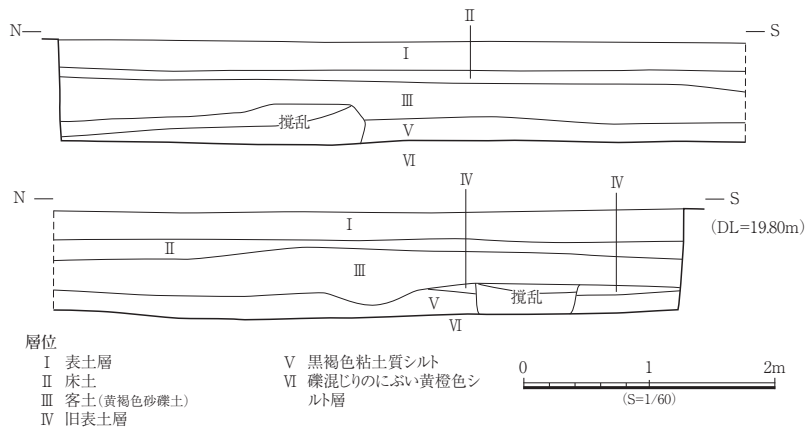


図4 1区-4東壁セクション

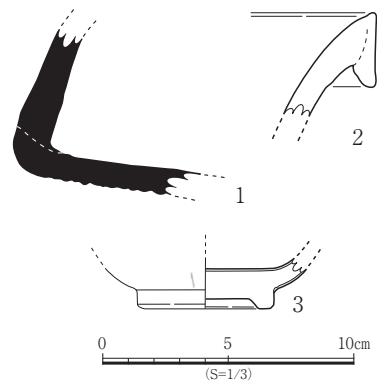


図5 1区出土遺物実測図1

② 2区

1区の東側の調査区で、6カ所にトレンチを設定した。いずれのトレンチも表土下は攪乱され、それに伴う客土となっており、遺物包含層や遺構は確認されていない。なお、客土は地表下3.5～4.0mまで及んでいた。

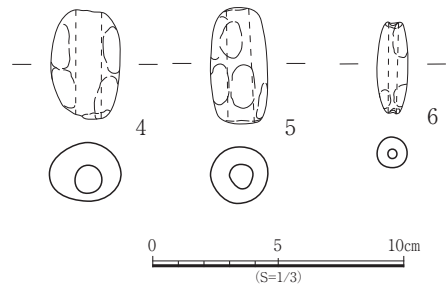


図6 1区出土遺物実測図2

③ 3区

1区と2区の南側に設定した調査区で、2カ所にトレンチを設定した。3区-1は1区の南側に位置し、表土下は攪乱を受け、地山は灰色砂層(粒径は不明)となっており、遺物、遺構は検出されていない。一方、3区-2では地表下1.06～1.11mで1区と同じ礫混じりののび黄橙色シルト層(地山)を確認し、その上面でピット状の遺構を2個検出している。なお、検出面の上層には厚さ5.0～10.0cmの黒褐色粘土質シルト層が認められ、糸切り底の土師質土器の細片が出土する。遺物は、3区-1の表土層から出土した土師質土器1点(図7-7)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図7-7)

羽釜の口縁部の細片で、口縁下には幅約1.0cmの鏝が巡る。鏝の下方には叩目の痕跡が僅かに残り、鏝外面下半には煤の付着が認められる。口唇部から外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施す。

④ 4区

塔心礎の北・東隣に設定した調査区で、3カ所にトレンチを設定した。塔心礎の北側の4区-1では、地表下0.6～0.7mで地山の黄褐色砂礫層を確認し、その上層で土師器片を含む薄い暗褐色粘土質シルト層が認められたものの遺構の検出には至っていない。一方、塔心礎東側に設定した4区-2・3では遺物包含層および遺構は検出されていない。4区-2の地山は黄褐色砂礫層で、その標高は北端で19.395m、南端で19.145mと北から南に向かって傾斜している。4区-3では地山の標高が17.445mで、礫混じりの明黄褐色粘土質シルト層となっており、4区-2と4区-3の間約20mで、地山に約2.0mの比高差が認められる。

(2) 平成7年度の調査

塔心礎を含め、周辺部に調査区を設定した。この内8区から比江廃寺跡の発掘調査では初めて礎石建物の礎石の掘り込み地業跡(壺地業跡)と考えられる遺構を確認した。

① 5区

塔心礎の北側に設定した東西22.0m、南北6.0m調査区で、攪乱が著しく遺構は検出されなかった。

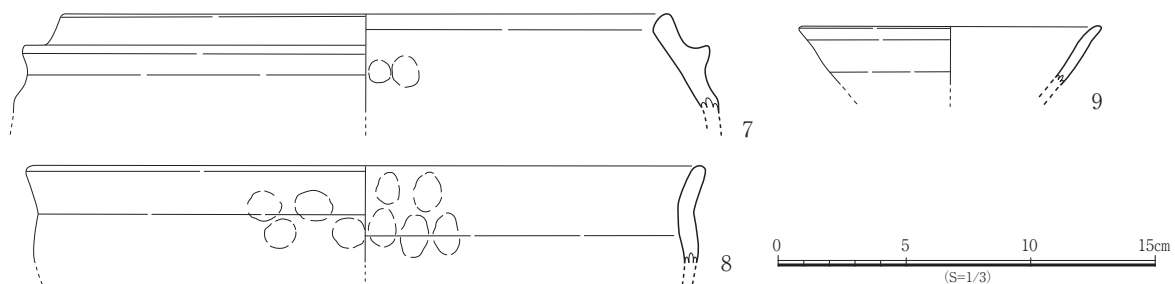


図7 3・8・10区出土遺物実測図

2. 各年度の調査

地表下約 0.4m で、地山の礫混じりのにぶい黄橙色シルト層および黄褐色砂礫層となっており、砂礫層は南北に溝状に走っている。また、地山にも製紙工場によるものとみられる攪乱が認められた。

② 6区

塔心礎の東側、平成元年度の調査区と平成2年度の調査区を跨ぐ形で設定した調査区である。以前に製紙工場が建っていた関係で、表土下地山まで攪乱が著しく、北東部で中世のピット2個が検出されたのみで明確な遺構等は遺存せず、平成2年度に検出している溝跡の続きも確認することができなかった。なお、地山は西側で黄褐色砂礫層となり、東に向かって傾斜し、東側ではその上層の褐色粘土質シルト層が地山となっていた。

③ 7区

塔心礎の設置状況を再度確認する目的で、設定した調査区である。塔心礎を中心として十文字にトレンチを設定し、北東方向の一角を拡張した。土層の状況並びに遺物については次章で報告する。

④ 8区

塔心礎の北西部、県道久礼田笠ノ川線を挟んだ水田に設定した調査区で、礎石建物跡2棟と塀跡1列などが検出され、塔跡との関連が注目される。遺構は表土直下で検出され、遺物包含層は遺存していなかった。表土層から出土した瓦質土器1点(図7-8)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器(図7-8)

鍋の口縁部の破片で、外面は摩耗が著しいものの内面にはヨコナデ調整の痕跡が残る。

⑤ 9区

8区の南隣、塔心礎とは県道久礼田笠ノ川線を挟んだ西側の水田に設定した調査区で、北側半分は表土下が地山(礫混じりのにぶい黄橙色シルト層および黄褐色砂礫層)となっており、砂礫層が北東部から南東部にかけて溝状に検出されている。一方、南側半分は約 0.2m の盛土となっており、その箇所十文字のサブトレンチを設定し、下層の黄褐色砂礫層上面でピットを確認している。

また、北側では礎石建物跡とみられる根石を伴う痕跡を検出している。なお、本調査区では遺構の掘削は行わず、検出のみに止めている。なお、遺物は須恵器片1点と近世陶磁器片6点が表土層から出土しているが復元図示できるものはなかった。

⑥ 10区

9区の西隣に設定した調査区で、溝跡、土坑、ピットを検出している。表土層の下層は中世の遺物包含層(第Ⅱ層)、地山の黄褐色砂礫層(第Ⅲ層)となっており、地山上面で溝状遺構1条、土坑1基およびピット14個を検出している。本調査区も遺構の掘削は行わず、検出のみに止めている。なお、第Ⅱ層から須恵器片5点と図示した緑釉陶器1点(図7-9)が出土している。

出土遺物

緑釉陶器(図7-9)

椀の口縁部の破片で、釉は外面を中心に剥離するものの内面から口唇部にかけて残存する。口縁部には回転ナデ調整が認められる。

第IV章 遺構と遺物

遺構が確認された調査区について、塔跡(7区)を中心に東部と西部に分けて記す。

1. 塔跡東部

塔跡東部で、遺構が検出された調査区は1区-2, 1区-3・4および1区-5であった。確認された時期は弥生時代, 古代, 中世の3時期に分かれる。

(1) 1区-2~4(付図1)

遺構には竪穴住居跡, 溝跡, ピットがあり, ピットの大半は中世のものとみられる。主な遺構には弥生時代の竪穴住居跡2軒, 古代の溝跡3条がある。

① 弥生時代

この時代に属するものは, 竪穴住居跡2軒であるが, 周辺のピットの中にはこの住居に伴うものも存在するものと思われる。

i 竪穴住居跡

ST-1

1区-4南端で確認した住居跡で, ST-2を切り, 北側約1/4を調査する。確認した北壁長は2.7mであるが, 実際は一辺4m前後と推測される。検出面からの深さは約0.12mと浅く, 遺存状態は良くない。床面北壁に沿って壁溝と見られる幅0.2mの溝が遺存する。それ以外に付随遺構は確認されていない。床面の標高は18.540m前後である。埋土は黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物の内, 図示できたのは3点(図8-10~12)であった。

出土遺物

弥生土器(図8-10~12)

いずれも鉢で, 10は形態的には皿とも言い得るもので口径12.0cmを測り, 底部は欠損するも口縁部から体部の一部が残存する。口縁部にはヨコナデ調整が施され, 内面にはヨコ方向の丁寧なヘラ

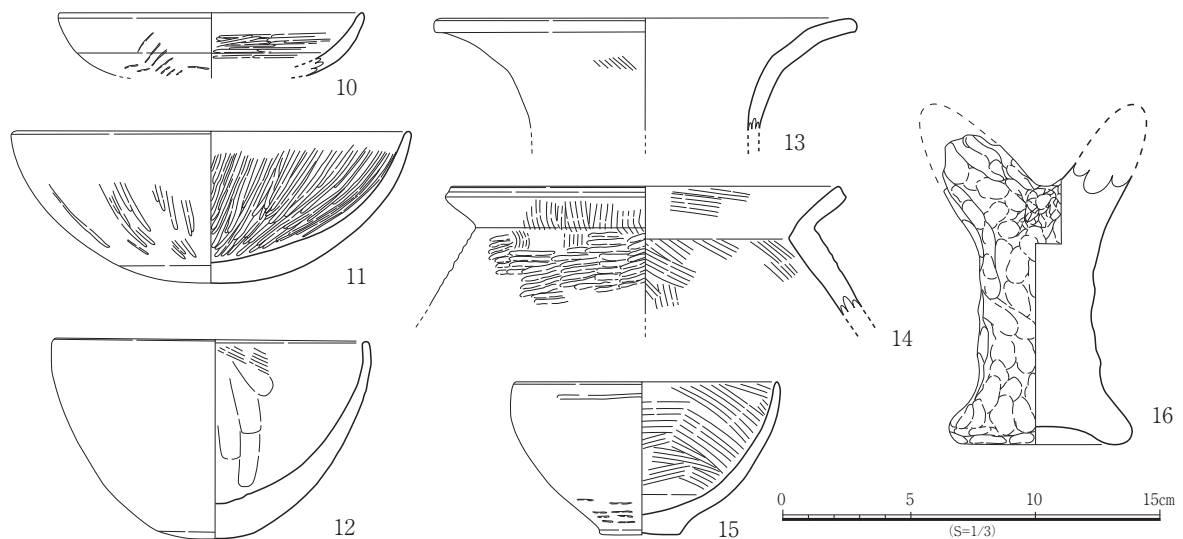


図8 ST-1・2出土遺物実測図

1. 塔跡東部

磨きが施され、外面には叩目の痕跡が残る。11はほぼ丸底で、口径15.9cm、器高6.1cmを測り、約1/4が残存する。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはヘラナデ調整の後に丁寧なヘラ磨きが放射線状に施される。外面にはヘラナデ調整の後に部分的にヘラ磨きが施される。12は底が深い鉢で、口径12.4cm、器高8.0cmを測る。調整はナデ調整で、口縁部内面にはハケ調整の痕跡が一部に残る。

ST-2

1区-4南東端で確認した住居跡で、北西側約1/3を確認している。西壁沿いと調査区東壁沿いにトレンチを設定し、前者で床面、後者でベット状遺構とみられる段部と床面を検出し、その間は未調査となっている。また、SD-3の東端に設定したトレンチでもベット状遺構とみられる段部を検出している。これらのことから一辺4.2m以上の住居跡で、床面北側にベット状遺構を伴っているとみられる。埋土はST-1と同じ黒褐色粘土質シルトである。出土遺物の内、図示できたのは4点(図8-13~16)であった。

出土遺物

弥生土器(図8-13~16)

13は壺の口縁部で、口径16.8cmを測る。大きく外反する口縁部外面は摩耗するが、一部にハケ目が認められる。14は甕で、口径15.3cmを測る。肩部から口縁部はくの字状をなし、口縁部内面にはヨコ方向、外面にはタテ方向のハケ調整を施した後にヨコナデ調整を加える。胴部内面には斜め方向のハケ目、外面には叩目が残存する。焼成は良く、内外面とも橙色を呈する。15は小型の鉢で平底となり、口径10.3cm、器高6.1cm、底径3.2cmを測る。内面にはハケ目、外面下半には僅かであるが叩目が認められる。16は支脚で、脚台部は中実で、受部には大小三つの角が付く。幅は7.5cmを測り、高さは約13.5cmとみられる。表面には成形時の指押えの痕跡が明瞭に残る。

② 古代

遺存状況は決して良くないものの南北方向に走る2条の溝、SD-1とSD-2が比江廃寺解明に繋がる可能性のある遺構と思われる。

i 溝跡

SD-1

1区-2の南部と1区-3北東部で検出した南北溝で、検出長7.4m、最大幅1.3m、検出面からの深さは約0.2mを測り、基底面の標高は18.985m前後である。主軸方向はN-0°08'36"-Wを示す。SD-2とは約3.0m(10尺)間隔で並走する形となる。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物には瓦片、須恵器片、土師質土器片がみられるものの図示できるものはない。

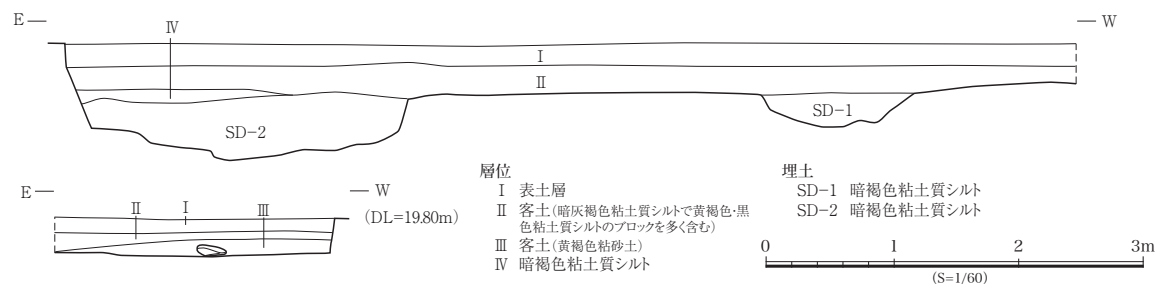


図9 1区-2南壁セクション

SD-2

1区-2東端部, 1区-4西端部で検出した南北溝跡で, 南北それぞれ調査区外に延びており, 平成2年度に確認されている溝跡(高知県 1991)との関連が注目される。検出長は17.5mで, 1区-2と1区-4の間は未調査である。また, 1区-4では東西2条の溝が重複したように中洲状を呈する箇所や窪みが各所でみられることから掘返しや溝浚えなどが行われたものと考えられ, 長期間機能した可能性がある。深さは検出面から0.2~0.5mで, 基底面の標高は18.745~18.795mを測り, 主軸方向はN-0°36'50"-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はSD-1と同じ暗褐色粘土質シルトである。遺物は, 溝が埋められた時に一度に投棄されたものとみられ, 土師質土器・瓦を中心に土師器, 埴輪, 須恵器, 黒色土器などが多数出土し, 105点(図10~21-17~121)が図示できた。

出土遺物

土師器(図10-17~19)

これらは古墳時代の土師器であり, 古代のそれとは別記している。17は小形丸底埴で約1/2が残存し, 口径10.9cm, 器高10.2cm, 胴径11.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整の後にヘラ磨きを施し, 胴部は, 内面が底面からヘラナデ調整を放射線状に行った上で上部にヘラ磨き, 外面がヘラナデ調整の後にヘラ磨きをそれぞれ加える。18は器台の皿部とみられるもので, 口径8.6cmを測る。口唇部から口縁部外面にはヨコナデ調整, 内面にはヘラ磨き, 底部外面にはハケ調整を放射線状に施す。焼成は良く, 内外面ともにぶい赤褐色を呈する。19は丸底の椀で, 口径12.4cm, 器高4.9cmを測る。口縁部はヨコナデ調整, 内面は放射線状のヘラナデの後にナデ調整, 外面はナデ調整をそれぞれ施す。

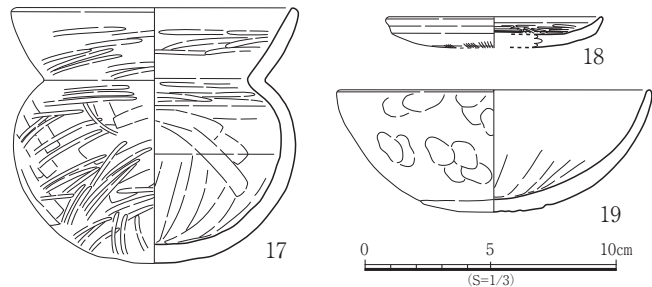


図10 SD-2出土遺物実測図1

埴輪(図11-20)

円筒埴輪の底部で, 伏原大塚古墳出土の埴輪(土佐山田町 1993, 廣田 1993)と同一製作技法によるもので, 底部は平坦な外底面からほぼ垂直に立ち上がり, 内側にはヨコ方向の指ナデ調整, 外面にはタテ方向のヘラナデ調整, 外底面にはナデ調整をそれぞれ施している。焼成は良好で, 色調は, 伏原大塚古墳の埴輪のほとんどが青灰色, 灰色ないし灰白色であったのに対し, 20は黄褐色~浅黄橙色と一般の埴輪の色合いを呈する。違いはこの点のみである。

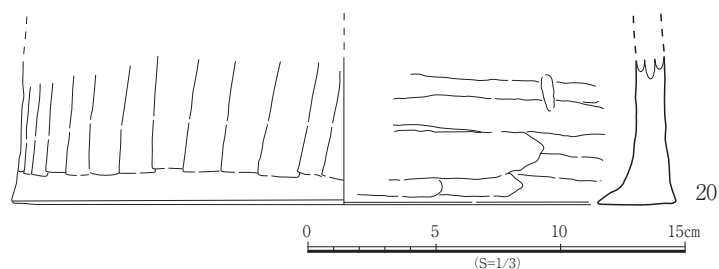


図11 SD-2出土遺物実測図2

瓦(図12・13-21~24)

21・22は軒丸瓦で, 21は内区と外区の一部しか残存しないが瓦当復元径は20cm前後と推測される。内区には3葉の無子葉単弁蓮華文が残り, 元は8葉であったものとみられ, 外区は内外縁の別がない⁽¹⁾。

1. 塔跡東部

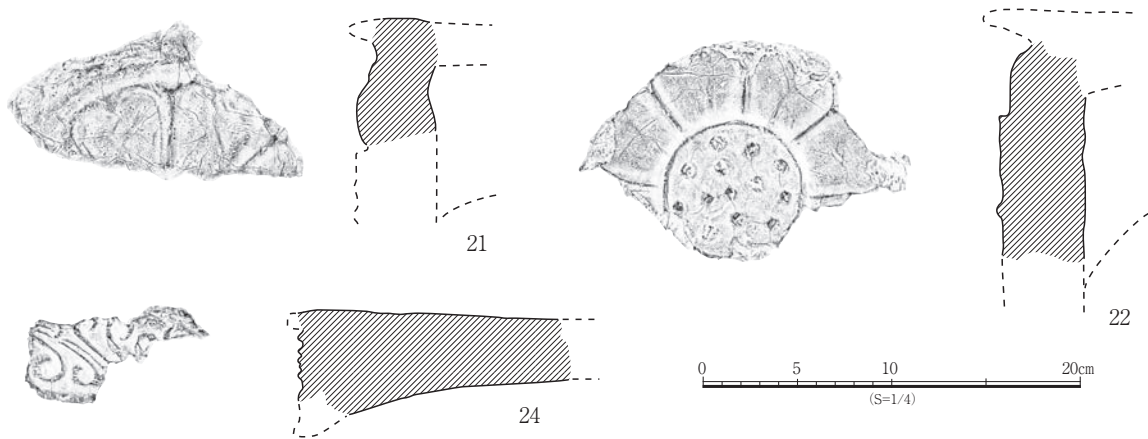


図12 SD-2出土遺物実測図3

焼成は不良で、灰黄色を呈する。22は内区約1/2と中房が残存し、瓦当復元径は20cm前後と推測される。内区には4葉の無子葉単弁蓮華文が残り、蓮弁の中央に1条の凸線を伴う。元は8葉であったものとみられる。中房は比較的大きく、14顆(1+4+9顆)の蓮子が残る。焼成は良く、黄灰色を呈する。23は無段式の丸瓦で、ほぼ完存し、全長33.8cm、全幅21.0cm、全厚2.7cmを測る。凹面は布目のみが残存し、側面はヘラ削り、凸面はヘラナデ調整が施される。焼成は不良で、灰白色を呈する。24は軒平瓦で、内区が残存し、忍冬唐草文がみられるものの中心飾り部分が欠如し、均整唐草文であったか⁽²⁾判然としない。額は残部から曲線額とみられるが、無額の可能性もある。凹面には模骨文と布目が残存し、凸面はヘラナデ調整が施される。焼成はやや不良で、灰黄色を呈する。

須恵器(図14-25~34)

25は杯蓋で、つまみを中心に約2/3が欠損する。平らな天井部には回転ヘラ削り調整の後にナデ調整、他は回転ナデ調整で、天井部内面にはナデ調整を加える。26~28は高台を有する杯身で、いずれも成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で底部のみ残存する。26は底径9.4cmを測り、底部外面端部にハの字形に開く高さ0.5cmの小さな高台が付く。器面には回転ナデ調整を施す。27は底径9.8cmを測り、底部外面端部にややハの字形をなす高さ0.7cmの高台が付く。底部外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整、内面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。28は大型で、底径15.0cmを測る。高台は高さ0.6cmで、端部よりやや内側に付き、底部外端には回転ヘラ削り調整が施され、内面にはヨコナデ調整の後にナデ調整を加える。29はベタ高台の杯で、底径7.0cmを測り、切り離しは回転糸切りによる。器面は摩耗が著しく調整は不明である。

30は鉢とみられるもので、底部から体部の一部が残存す



図13 SD-2出土遺物実測図4

る。底径は13.2cmを測り、切り離しは回転ヘラ切りとみられる。器面は摩耗し調整は不明である。31は短頸壺で口縁部から胴部の約1/3が残存する。口径4.6cm、胴径9.6cmと小型で、肩部には焼成時に蓋を被せたとみられる痕跡が残る。器面は回転ナデ調整で、外面肩部から中胴部にかけて自然釉が付着する。32は提瓶ないし横瓶の口縁部とみられるもので、口径7.0cmを測る。口縁部外面中位に1条の凹線が巡る。器面は回転ナデ調整で、内面には自然釉、外面には一部に自然釉が残るもののハダ荒れが著しい。33は双耳壺の肩部とみられるもので、肩部には形骸化した把手1個が残る。外面は回転カキ目調整の後に2条の凹線を巡らせ、回転ナデ調整を加える。内面には回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、灰黄褐色を呈する。34は甕の底部とみられるもので、底径11.0cmを測る。底部外面にはヘラ切り痕跡、下胴部にはヘラ削り痕跡が残る。他は回転ナデ調整である。

緑釉陶器(図14-35)

碗で、底部が残存し、底径6.0cm、高台高0.6cmを測る。器面は回転ナデ調整で、体部下端には回転ヘラ削り痕跡が残る。高台周囲はヨコナデ調整を施し、高台外側から内面にかけて緑釉を施釉するも内面の釉は大半が剥離している。焼成は良く、色調は、内面が灰色ないし灰オリーブ色、外面がオリーブ灰色ないし明黄褐色、断面が灰色ないし明黄褐色を呈する。

土師質土器(図15-19-36-107)

復元図示できる個体数が最も多かった遺物で、皿、杯、碗に大きく分類でき、灯明皿として使用さ

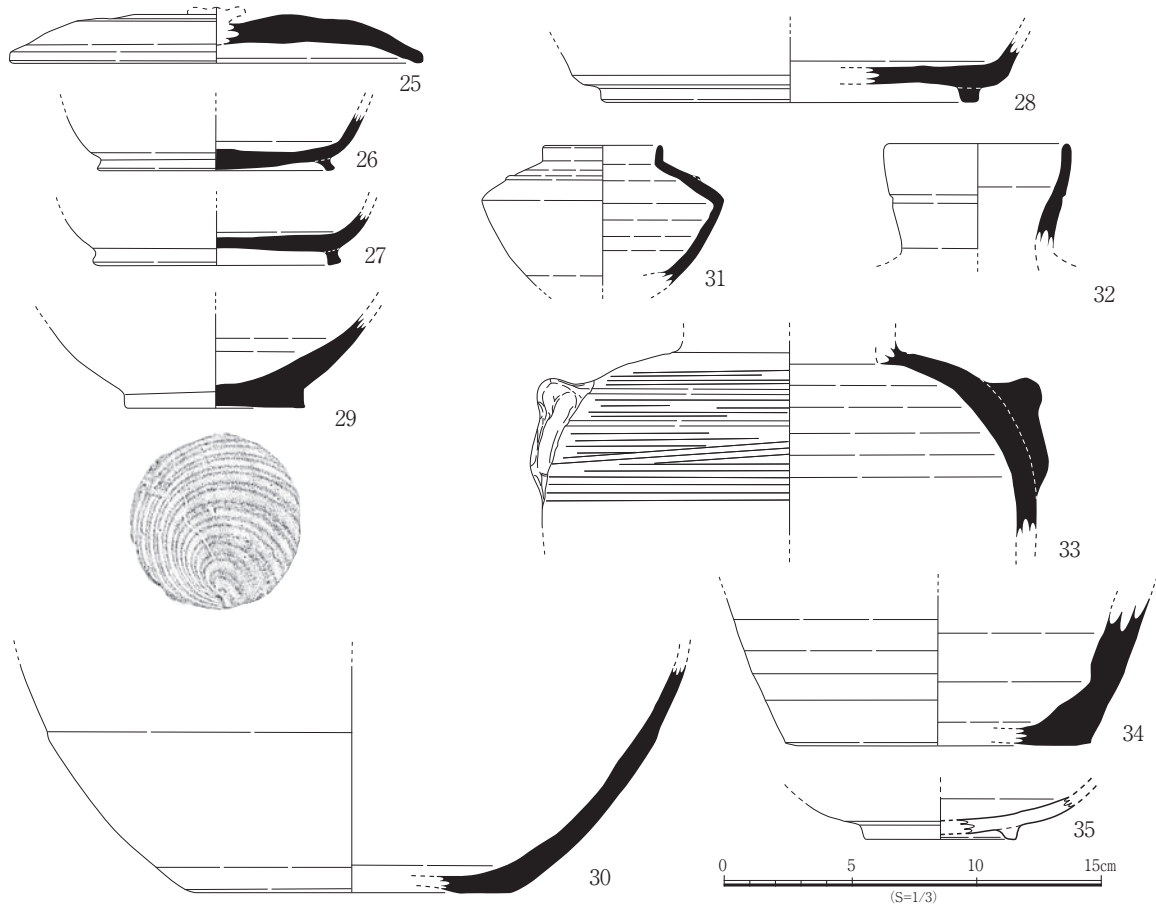


図14 SD-2出土遺物実測図5

1. 塔跡東部

れたものが9点(48, 60, 62, 67, 72, 76, 80, 89, 92)含まれる。また、杯の中には底部が深く椀と表現し得るものもある。胎土は全般に精良なもので細粒砂から粗粒砂を僅かに含む。成形はすべて粘土紐巻き上げロクロ成形で回転ナデ調整を施し、ロクロ未使用のものはなく、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。このような成形技法をA技法、ロクロ水挽成形をB技法(廣田 2000, 高知県 2002, 奈半利町 2003)と呼称する。これらは底部の形態と器高指数によって、区分できる。なお、残存部位については特に記さない限り、口縁部から底部にかけての一部が残存している破片である。

まず、36～57は皿に分類したもので、器高指数が15前後のもの(36～44)と20前後のもの(45～57)に区分でき、且つ、底部が平坦なもの(36～52, 切り離しが丁寧且つナデ調整などを加えているもの)とやや凸状をなすもの(53～57, 切り離しがやや粗雑なもの)にさらに細分することが可能である。

36は、口縁部が丸くなるもので、焼成は良く、橙色を呈する。37は、焼成はやや不良で、器面は摩耗する。色調は橙色を呈する。38は、焼成は良く、橙色を呈し、内底面に回転ナデ調整の後にナデ調整を加えている。39は底部1/3と口縁部の一部が残存し、焼成は良く、浅黄橙色を呈する。40は、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面に回転ナデ調整の後にナデ調整を加えている。41は、焼成は極めて良く、橙色を呈する。42は、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。43は、焼成は良く、橙色を呈し、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。内面には粘土紐の接合痕跡が残る。44は約2/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。45はほぼ完存するもので、焼成は良く、橙色を呈し、内底面に回転ナデ調整の後にナデ調整を加えている。46・47は、いずれも焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。48は底部と体部1/2及び口縁部の一部が残存する。内面底部から体部にかけて煤とタールが付着し、灯明皿として使用されていたものとみられる。焼成はやや不良で、橙色を呈する。49は、焼成は良く、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。50は、焼成は良く、橙色を呈する。51は底部約1/4と口縁部の一部が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈し、内底面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。52は、焼成は良く、内面は灰黄色、外面はにぶい黄橙色を呈し、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。53は約2/3が残存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。

54～57は前述のとおり、底部がやや凸状をなすものである。54は口縁部約3/4が欠損するもので、焼成はやや不良で、橙色を呈し、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。55は、焼成は良く、橙色を呈し、56は約1/2が残存するもので、焼成が

表1 土師質土器(皿)計測表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器高指数	備考
36	13.4	1.3	9.4	9.7	
37	12.5	1.5	9.7	12.0	
38	11.4	1.6	8.2	14.0	
39	12.3	1.9	9.1	15.4	
40	11.8	1.9	7.6	16.1	
41	11.6	2.1	8.2	18.1	
42	11.8	1.6	9.0	13.6	
43	12.2	1.8	8.8	14.8	
44	12.1	2.0	9.8	16.5	
45	12.8	2.5	8.1	19.5	
46	12.7	2.5	8.2	19.7	
47	12.2	2.5	6.7	20.5	
48	12.7	2.6	8.1	20.5	灯明
49	12.2	2.5	7.4	20.5	
50	12.7	2.7	7.8	21.3	
51	13.6	3.0	8.3	22.1	
52	12.6	2.8	9.2	22.2	
53	13.3	3.0	7.3	22.6	
54	12.3	2.3	7.8	18.7	
55	12.2	2.6	8.7	21.3	
56	12.5	2.7	9.5	21.6	
57	12.3	2.8	9.0	22.8	

良く、橙色を呈し、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。57は底部と口縁部約1/3が残存するもので、焼成が良く、黄橙色を呈する。

58～102は杯に分類したもので、器高指数が25前後のもの(58～81), 30前後のもの(82～92), 35前後のもの(93～102)に区分でき、それぞれ平底のもの(58～68, 81～84, 93～97), やや凸状をなすもの(69～79, 85～92, 98～102)に細分することが可能である。

58は底部と口縁部約1/2が残存するもので、焼成はやや不良で、橙色ないし明赤褐色を呈し、内面にはロクロ目が僅かに残る。59は約1/2弱が残存するもので、焼成は不良で、橙色を呈し、器面は摩耗する。60は約1/2弱が残存するもので、内底面に煤とタールが付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。焼成は良く、内面はにぶい黄橙色、外面は浅黄橙色を呈する。底部外面には板状圧痕が残る。61は、口縁部内面に折り込みの痕跡が凹線状の凹みとなるもので、焼成は不良で、内面は浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。62は口縁部を欠損するが、体部内面に煤とタールが付着し、

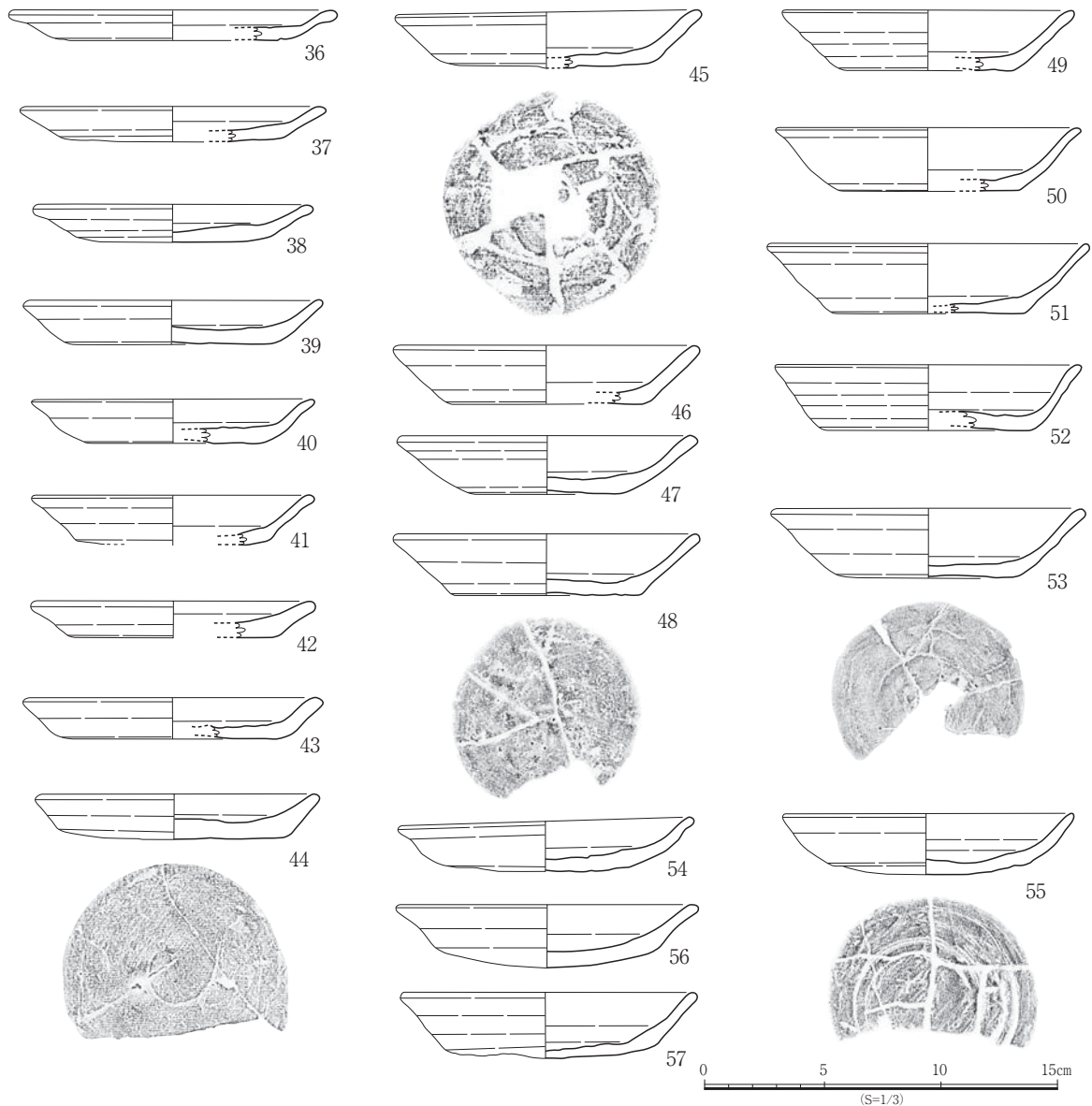


図15 SD-2出土遺物実測図6

1. 塔跡東部

灯明皿として使用されたものとみられる。焼成は良く、明赤褐色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。63は、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。64は約1/2が残存するもので、焼成は良く、内面は明赤褐色、外面は橙色を呈する。65は、焼成は良く、橙色を呈し、底部外面には板状圧痕と粘土紐の接合痕が残る。66は口縁部の一部が欠損するもので、焼成は良く、内面はにぶい黄橙色、外面は灰褐色を呈し、内底面にはナデ調整を加え、外底面には板状圧痕が残る。67は底部と口縁部1/2が残存する。口唇部に煤とタールが付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。焼成は良く、橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。

68～79は前述のとおり、底部がやや凸状をなすものである。68はほぼ完存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面にナデ調整を加える。69は、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。内底面と外底面にはナデ調整を加える。70は、焼成は良好で、橙色を呈する。内底面にはナデ調整を加える。71は約1/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。内底面にはロクロ目が残り、外底面はナデ調整を加える。72は口唇部が欠損するもので、内外面とも煤とタールが部分的に付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。焼成はやや不良で、内面は黒色ないしにぶい褐色、外面は黒褐色ないしにぶい赤褐色を呈する。73は約1/3が残存するもので、焼成は良く、にぶい橙色を呈し、底部外面には板状圧痕が残る。74は口縁部の一部が欠損するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。内面にはナデ調整を加える。75は底部と体部の1/3及び口縁部の一部が残存するもので、焼成は良く、内面は黄橙色、外面は橙色を呈する。76は、口唇部に煤が付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。焼成は良く、にぶい黄橙色ないし黒色を呈する。77は、焼成は良く、橙色を呈し、内底

表2 土師質土器(杯)計測表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器高指数	備考
58	12.4	2.9	8.2	23.4	
59	13.2	3.1	9.4	23.5	
60	12.0	2.9	7.3	24.2	灯明
61	12.8	3.1	8.0	24.2	
62	-	(1.9)	8.0	-	灯明
63	12.2	3.0	9.2	24.6	
64	11.8	3.0	8.7	25.4	
65	11.6	3.0	7.6	25.9	
66	11.8	3.1	7.8	26.3	
67	11.4	3.0	7.8	26.3	灯明
68	11.7	3.1	7.9	26.5	
69	11.4	2.7	9.0	23.7	
70	13.7	3.3	8.0	24.1	
71	12.6	3.1	9.0	24.6	
72	13.4	3.3	7.4	24.6	灯明
73	12.7	3.2	8.9	25.2	
74	12.2	3.1	7.5	25.4	
75	12.2	3.2	8.5	26.2	
76	12.2	3.2	7.6	26.2	灯明
77	12.6	3.3	7.8	26.2	
78	12.4	3.3	8.5	26.6	
79	12.0	3.2	7.3	26.7	
80	11.9	3.2	8.1	26.9	灯明
81	12.3	3.3	7.3	26.8	
82	12.6	3.5	8.0	27.8	
83	10.9	3.2	6.8	29.4	
84	12.8	3.9	8.0	30.5	
85	12.7	3.4	8.4	26.8	
86	12.6	3.5	7.6	27.8	
87	13.0	3.7	8.7	28.5	
88	11.8	3.4	7.2	28.8	
89	11.8	3.6	7.8	30.5	灯明
90	11.4	3.5	8.5	30.7	
91	11.7	3.6	6.7	30.8	
92	11.1	3.6	7.2	32.4	灯明
93	13.4	4.4	6.7	32.8	
94	12.6	4.3	7.4	34.1	
95	13.0	4.5	7.4	34.6	
96	12.8	4.7	7.4	36.7	
97	12.6	5.0	7.0	39.7	
98	13.6	4.8	8.0	35.3	
99	12.4	4.5	7.7	36.3	
100	12.4	4.6	8.2	37.1	
101	13.0	5.0	7.8	38.5	
102	13.4	5.6	7.7	41.8	

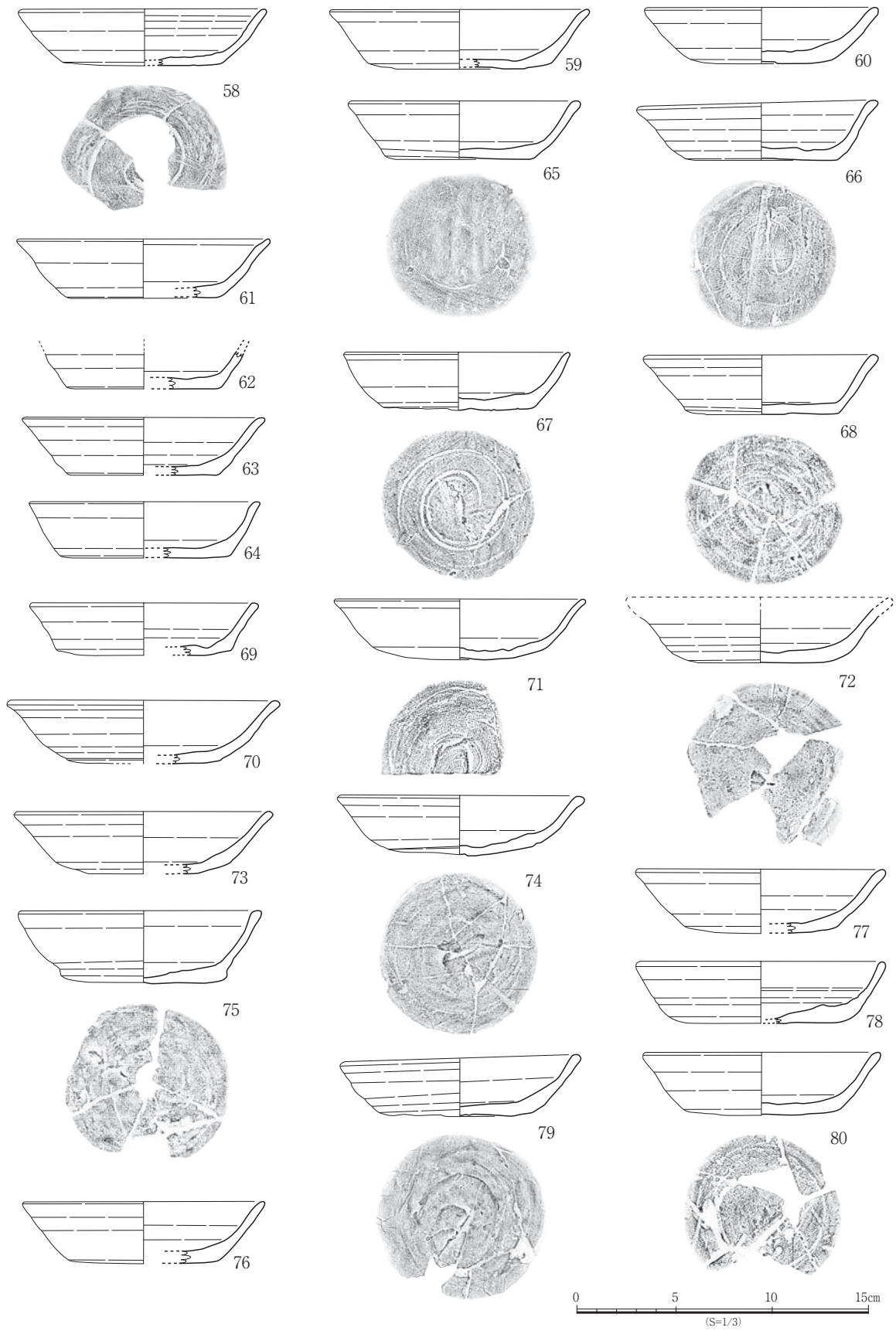


図16 SD - 2出土遺物実測図7

1. 塔跡東部

面にはナデ調整を加える。78は約1/2が残存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面にはナデ調整を加え、外底面には板状圧痕が残る。79はほぼ完存するもので、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。体部外面にはロクロ目が僅かに残る。80は底部と口縁部約1/3が残存するもので、口縁部内面に煤が付着し、灯明皿として使用されたとみられる。焼成は良く、内面は浅黄色ないし黒色、外面は橙色を呈し、内底面にはナデ調整を加える。

81～84は、底部が平らなものである。81は約1/3弱が残存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面にはナデ調整を加える。82は、焼成は良く、内面は黒褐色、外面はにぶい黄橙色、断面は黒褐色を呈する。83は約1/2が残存するもので、焼成はやや不良で、橙色を呈する。体部外面は未調整で、器面は摩耗する。84は底部と口縁部約3/4が残存するもので、焼成はやや不良で、橙色を呈する。器面は内面を中心に摩耗が著しい。

85～92は、底部がやや凸状をなすものである。85は、焼成は良く、内面は橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。86は底部約3/4と口縁部1/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。内底面にはナデ調整を加える。87は、焼成はやや不良で、橙色を呈する。器面は全般に摩耗する。88は約1/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。体部から底部外面にかけて摩耗する。89は底部と口縁部約1/3が残存するもので、内面と口縁部外面に煤とタールが部分的に付着し、灯明皿として使用されたものとみられる。焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、体部外面は未調整である。90は約1/2が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。91はほぼ完存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈し、内底面にはナデ調整を加える。92は約1/2が残存するもので、内面と体部外面の一部に煤が付着し、灯明皿として使用されたとみられる。焼成は良く、浅黄橙色を呈し、外底面には丁寧なナデ

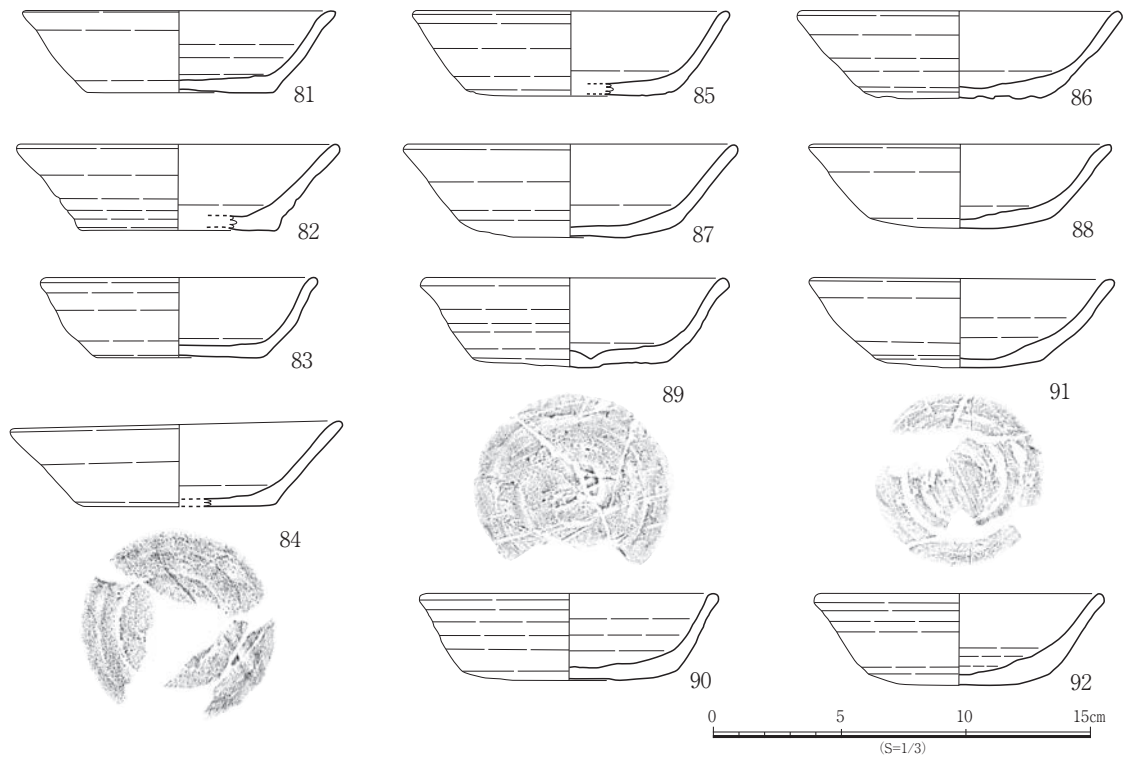


図17 SD - 2出土遺物実測図8

調整を加える。また、器には焼成時の歪みがみられる。

93から97は底部が平らなものである。93は約1/2が残存するもので、口縁部内面には折り込みの痕跡とみられる凹線状の凹みが残る。焼成は不良で、橙色を呈し、器面は摩耗する。94は約1/2が残存するもので、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。体部外面は未調整で、内底面にはナデ調整を加える。95は約1/3が残存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。96は約1/3が残存するもので、口縁部内面には折り込みの痕跡とみられる凹線状の凹みが残る。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色、外面は橙色を呈する。体部外面は未調整である。97は底部と口縁部約1/2が残存するもので、内面は橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。内底面にはナデ調整を加え、外底面には粘土紐の接合痕が残る。

98～102は底部がやや凸状をなすものである。98は約2/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。99は底部と口縁部約1/4が残存するもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。体部内面にはロクロ目が僅かに残り、内底面にはナデ調整を加える。100は、焼成は良く、内面はにぶい黄橙色、外面は橙色を呈する。内底面にはナデ調整を加え、外底面には板状圧痕が残る。101は約1/2が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈し、外底面にはナデ調整を加える。102は底部と口縁部約1/3が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈し、外底面にはナデ調整を加える。

103～107は椀で、高台が付く。103は底部2/3と口縁部の一部が残存するもので、口縁部内面には

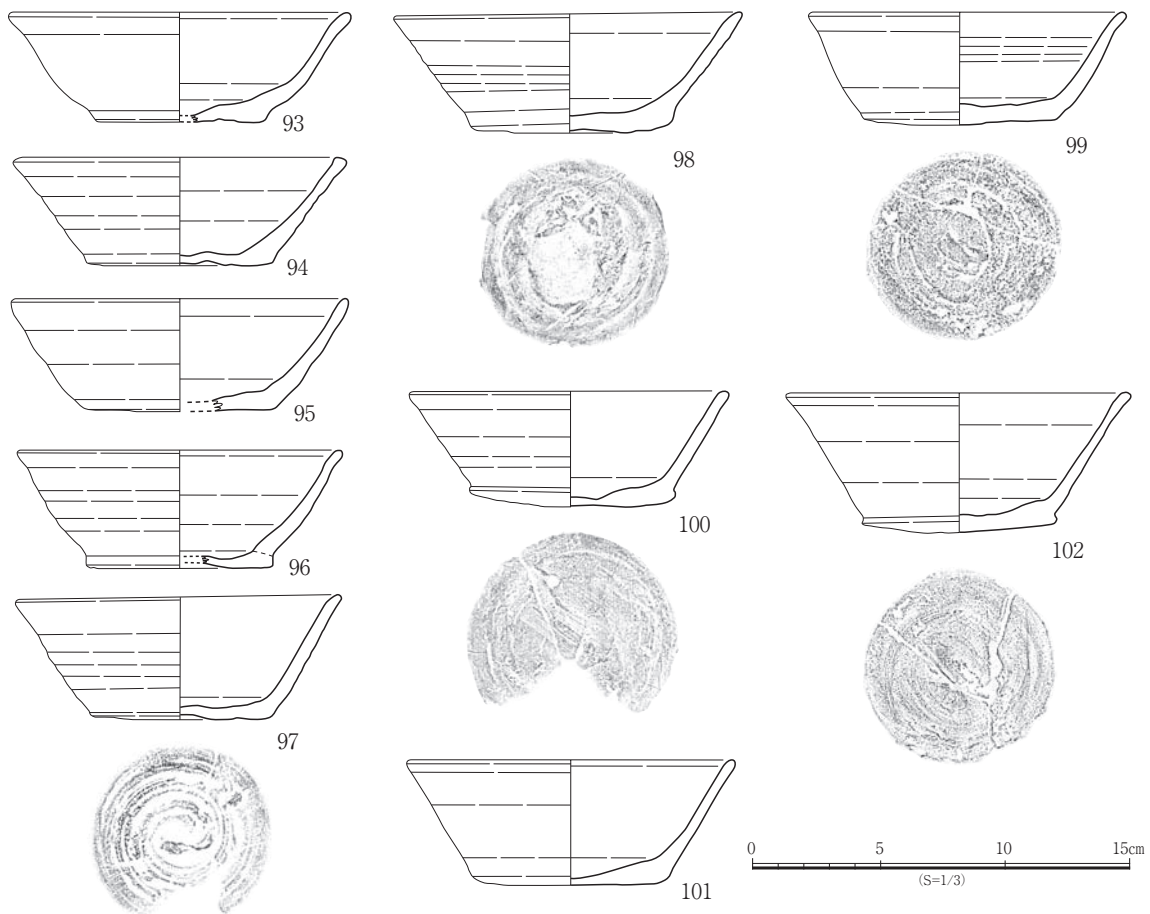


図18 SD - 2出土遺物実測図9

1. 塔跡東部

折り込みの痕跡とみられる凹線状の凹みが残し、外底面には高さ0.5cmの断面逆三角形の高台が付く。焼成は良く、橙色を呈する。104は底部と口縁部の一部が残るもので、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。外底面には高さ0.5cmの断面逆三角形の高台が付く。器面は内面を中心に摩耗する。105は約1/2が残存するもので、焼成は不良で、橙色を呈する。外底面には高さ0.7cmの高台が付く。器面は全般に摩耗が著しい。106は底部が残存するもので、焼成は良く、橙色を呈する。外底面には逆三角形で高さ1.3cm、径5.6cmを測る高台が付く。107は底部の一部が残存するもので、焼成は良く、浅黄橙色を呈する。外底端部にハの字形に開く高さ2.3cmの高台が付き、内底面にはナデ調整を加える。

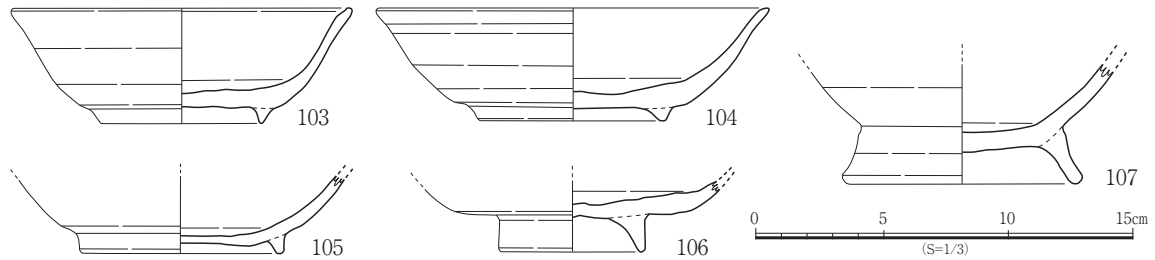


図19 SD-2出土遺物実測図10

土師器(図20-108~119)

108は高杯で、脚台部の大半と杯部の一部が残存する。杯部は所謂左手手法でロクロ未使用であるが、裾部が大きく開く脚台部の成形はA技法であり、土師器と土師質土器の折衷となっている。焼成は良く、橙色を呈する。

109~116は甕である。109は口縁部から中胴部の約1/3が残存するもので、肩部から口縁部はくの字形をなし、口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はヨコ方向のハケ調整、胴部内面はナデ調整を施し、内面には一部にハケ目残り、外面には煤が付着する。焼成はやや不良で、内面は明赤褐色、外面は橙色ないし黒色を呈する。110は口縁部の破片で、肩部から口縁部はくの字形をなし、口縁部はヨコナデ調整、胴部内外面ともヨコ方向のハケ調整を施す。焼成は良く、橙色を呈する。111は、頸部が胴部から屈曲し、口縁部が受け口状をなすもので、口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面には叩目、内面にはナデ調整を施す。焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。

112~116はほぼ直立する胴部から口縁部が外傾する甕で、112のみ丸底の底部の一部が残存する。112は底部を欠くもののほぼ全体を知ることができる個体で、焼成は良く、明赤褐色を呈し、口縁部にはヨコナデ調整、胴部外面には平行の叩目を施し、胴部内面は摩耗するがヘラナデ調整の後にナデ調整を施したものとみられる。113・114は上胴部から口縁部の一部が残存し、内面と胴部外面にヨコ方向のハケ調整を施し、口縁部にはヨコナデ調整を加える。焼成は良く、にぶい橙色を呈する。115も上胴部から口縁部の一部が残存し、胴部外面にはヨコ方向のハケ目が残るものの、他は摩耗し調整不明である。焼成はやや不良で、内面は橙色、外面は明黄褐色を呈する。116は口縁部の一部が残存し、口縁部にはヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。焼成は良く、にぶい橙色を呈する。

117~119は羽釜である。117は上胴部から口縁部の一部が残存し、口縁下には外上方を向く幅2.5cmの鏝が巡る。鏝の上面と胴部外面にはハケ調整、口縁部と鏝にはヨコナデ調整、胴部内面にはナデ調整を施す。焼成は良く、内面は橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。118は口縁部と鏝の一部が残

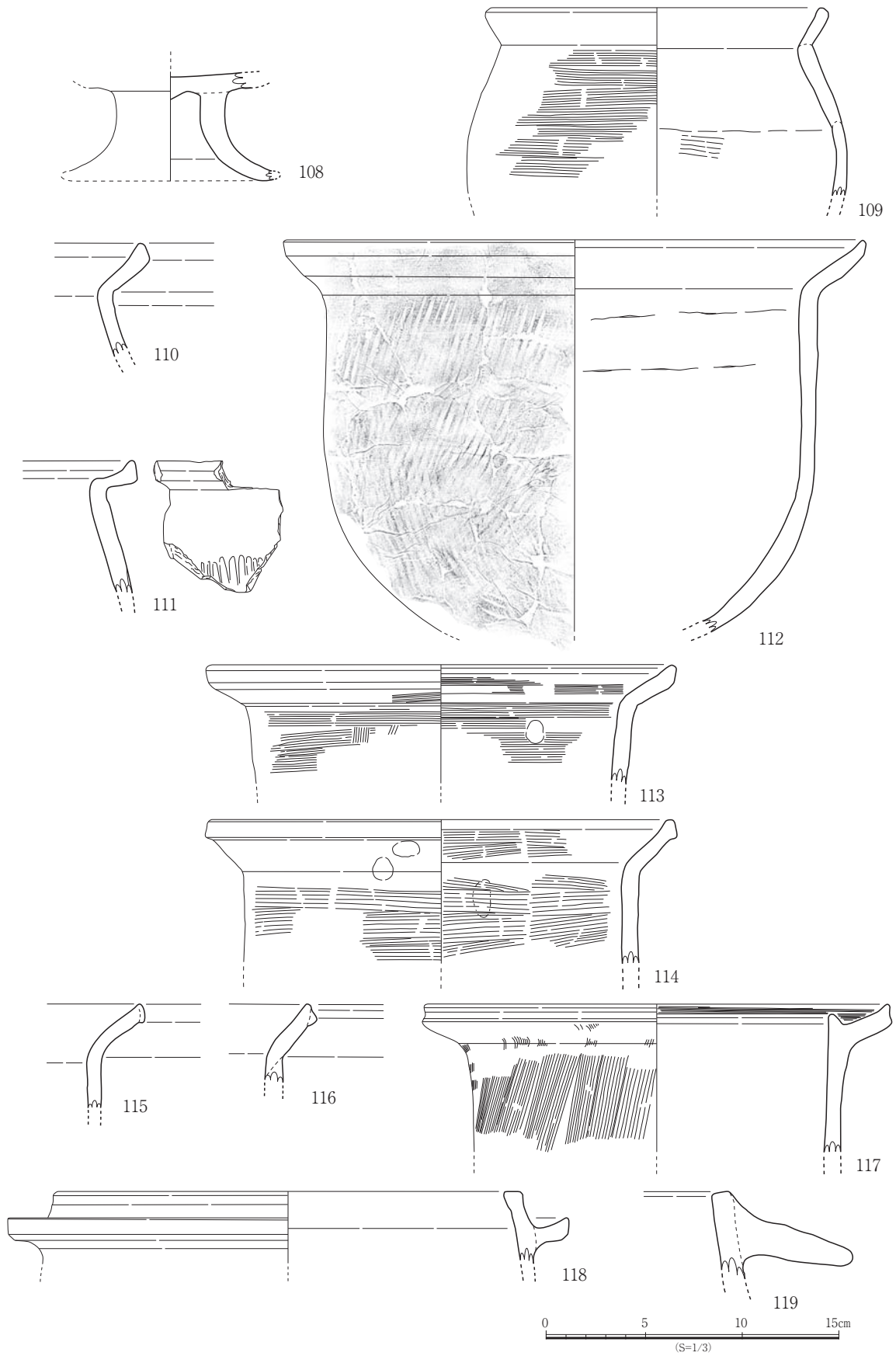


図20 SD-2出土遺物実測図11

1. 塔跡東部

存するもので、口縁下には幅1.8cmで、外上方を向く鏝が巡る。鏝と口縁部外面にはヨコナデ調整、内面にはナデ調整を施す。鏝下半には煤が付着する。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色ないし黒褐色を呈する。119は幅6.0cmの鏝と口縁部の一部が残存するもので、内傾する口縁部外面には外下方を向く大きな鏝が巡り、下面を中心に煤が付着する。鏝はヨコナデ調整で、下端にはハケ調整の痕跡が残る。焼成は良く、内面は浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

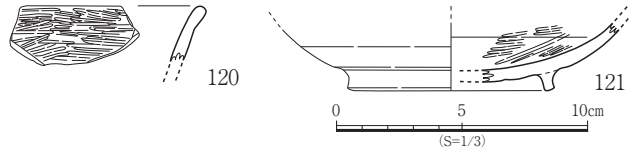


図21 SD-2出土遺物実測図12

黒色土器(図21-120・121)

2点とも内黒椀で、同一個体の可能性もある。120は口縁部の破片で、口縁部はヨコナデ調整で、内面にはヘラ磨きが施される。焼成は良く、内面は黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。121は底部から体部の約1/3が残存するもので、高さ0.8cmの高台が付く。内面にはヘラ磨き、他はヨコナデ調整で、外底面には粘土紐の接合痕が残る。焼成は良く、内面は黒色、外面は灰褐色を呈する。

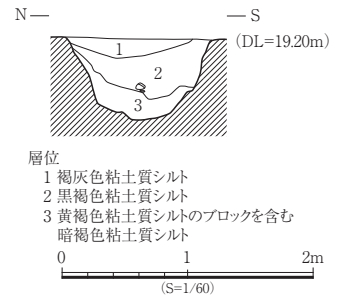
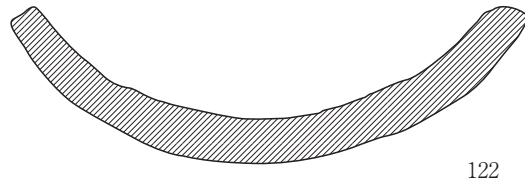


図22 SD-3

SD-3(図22)

1区-4南側で検出した舟形の東西溝跡であるが、舟形土坑とも言い得るものであり、SD-2に切られる。全長6.3m、最大幅1.1m、検出面からの深さは約0.65mを測り、基底面の標高は約18.375mである。断面はU字形を呈し、埋土は3層に分層され、下層から黄褐色粘土質シルトのブロックを含む暗褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルト、褐灰色粘土質シルトとなっていた。遺物には弥生土器片を中心に瓦片、須恵器片、土師器片等がみられ、平瓦1点(図23-122)が図示できた。



出土遺物

瓦(図23-122)

平瓦で、ほぼ完存し、全長34.3cm、全幅29.3cm、全厚2.4cmを測る。凸面には格子目の叩目が4カ所に施され、粘土紐の接合痕、布目が残る。凹面には模骨文と布目が明瞭に残る。焼成は不良で、灰黄色を呈する。



図23 SD-3出土遺物実測図

ii ピット

P-1

1区-4南端部, SD-2を掘り込む形で検出した不整円形のピットである。図示した土師質土器(図24-123)が出土している。

出土遺物

土師質土器(図24-123)

皿で、底部を中心に一部が残存しており、口径12.1cm, 器高2.0cm, 底径9.5cmを測る。口縁部から体部外面にかけて煤とタールが付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。成形はA技法で、器面はヨコナデ調整を施し、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。焼成は良好で、橙色ないし黒褐色を呈する。

③ 中世

SD-1の以東で検出されているピットの大半はこの時期に属すると思われる。

i ピット

P-2

1区-4南東部, ST-2検出面で確認した不整円形のピットである。図示した土師質土器(図24-124)が出土している。

出土遺物

土師質土器(図24-124)

杯で、底部と体部から口縁部の約1/3が残存しており、口径12.8cm, 器高4.2cm, 底径4.0cmを測る。成形はB技法で、器面には水挽成形時のロクロ目が明瞭に残り、未調整となっている。底部の切り離しは回転糸切りによる。焼成は良く、橙色を呈する。SD-2出土の土師質土器とは、成形技法が異なるものである。

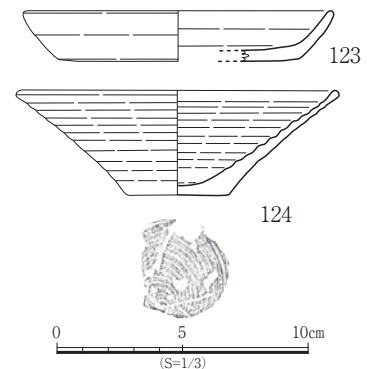


図24 ピット出土遺物実測図

(2) 1区-5(図25)

中央にバンクを残した形のトレンチで溝状遺構とピットを検出しているものの東西10m, 南北3.5mと狭い調査区で、その詳細は判然としない。図示できる遺物は出土していないもののいずれも中世と判断されるもので、西側の調査区で検出した中世の遺構と一連のものと考えられ、周囲には当該期の遺構が遺存しているものと判断される。

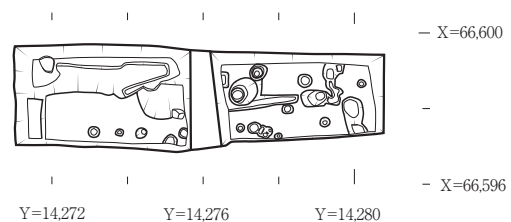


図25 1区-5遺構平面図

2. 塔跡(付図2)

今回の調査(7区)では、昭和44年度の調査結果(高知県 1970)の検証と新たな手掛かりを探るものであった。

2. 塔跡

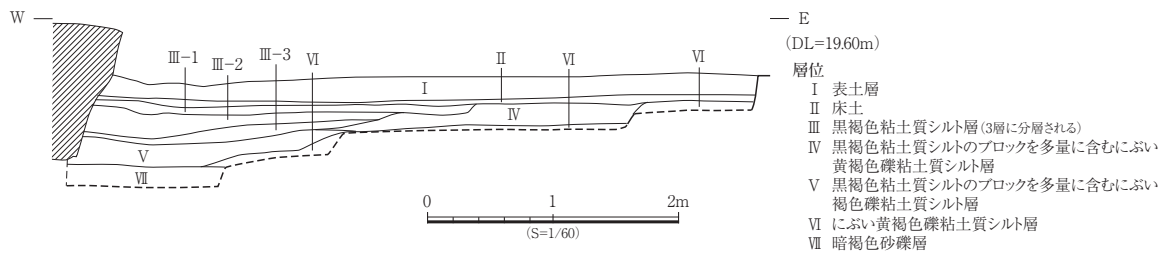


図26 塔心礎東トレンチセクション

まず、昭和44年度の調査結果を要約すると、「塔の基壇は栗石の分布範囲から一辺38尺(11.4m)と推測され、塔心礎は完新世に形成された沖積面、さらに更新世の中位下段丘面の砂礫層を掘削した上で据えられ、その周囲には後世の掘起しを試みた際の堆積土である礫混じりの暗褐色～黒色砂質シルトがみられるものの、塔心礎は原位置を保っており、この下層には栗石を並べた人工層(整地層)や黒色土(黒ボク混じりの黒色粘土質シルト～シルト)がみられ、黒色土からは7世紀中葉前後の遺物が出土している。」ことになる。

今回の調査では、塔心礎は原位置を保っていること、塔心礎を中心に南東側に掘り込み地業が行われていること、そしてそれを構成している版築土から塔心礎の創建時期の解明に繋がる資料が出土したことが挙げられる。

ここでは、版築の堆積が確認された塔心礎の東側に設定した東トレンチで、土層の状況のみをみる。土層は大きく7層に分層される。第I層は表土層で、第II層は第I層に伴う床土で、かつて塔心礎の周囲が水田であったことが分かる。第III層から第V層が版築状をなす部分で、第III層は黒褐色粘土質シルトの互層となっており、3層に分層している。昭和44年度の報告の黒色土(A4層)に対応する⁽³⁾。第IV層は黒褐色粘土質シルトのブロックを多量に含むにぶい黄褐色礫粘土質シルト、第V層も基本的には同じであるが色調がやや異なり黒褐色粘土質シルトのブロックを多量に含むにぶい褐色礫粘土質シルトとなっている。第VI層はにぶい黄褐色礫粘土質シルト層で昭和44年度の報告のB4層((3)の第VII層に対応)に対応するとみられる。第VII層は暗褐色砂礫層で昭和44年度の報告のC層((3)の第VIII層に対応)に対応するとみられる。このうち、地業に関連する堆積土はセクションにみられるように塔心礎東端から東へ4.3mの地点から第VI層と第VII層を掘り込み、塔心礎の東端下部まで及んでいる。

一方、西では塔心礎西端から西に0.5m、南では塔心礎南端から6.5m、北では塔心礎北端から1.5mの地点からそれぞれ掘り込まれ、塔心礎西側では塔心礎縁に沿って栗石の根石が検出されている。また、東トレンチの北側の拡張区でも掘り込みが認められる。この状況から推測すると南東側に掘り込みが広がっているものとみられ、塔心礎の搬入路をその方向に求めることもできる。何れにし

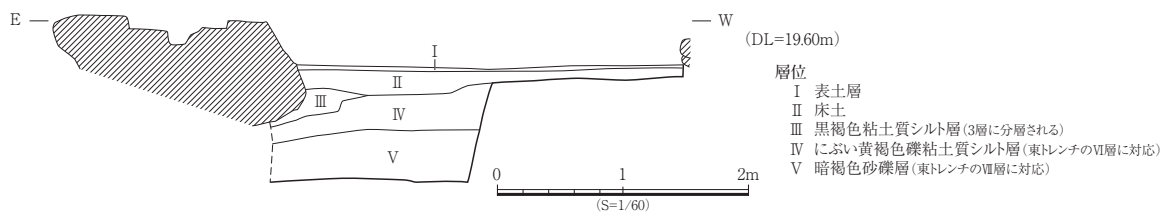


図27 塔心礎西トレンチセクション

でも、南東側を中心に掘り込み地業が行われていたと判断される。なお、遺物は、第I層から弥生土器片から近世陶磁器片まで、第III層から弥生土器片50点、土師器2点、瓦片2点、須恵器片7点、第V層から弥生土器片1点、須恵器片2点が出土し、図示できたのは第I層から出土した125、第III層から出土した126・127、そして東トレンチの「黒色土下」と註記された須恵器、すなわち128の杯蓋が第V層から出土している。

また、第III層からは126と比べ形態的にやや新しい杯身の口縁部(受部から立ち上りの細片)と壺などの口縁部ではないかとみられる細片が伴出している。

出土遺物

須恵器(図28 - 125~128)

125・126は杯身である。125は約1/3が残存し、口径12.1cm、器高4.0cm、立ち上り高1.0cm、受部14.0cmを測る。丸味のある底部には約2/3に回転ヘラ削り調整が施され、立ち上りは内湾気味に短く上方に立ち上る。端部は細い。器面は回転ナ

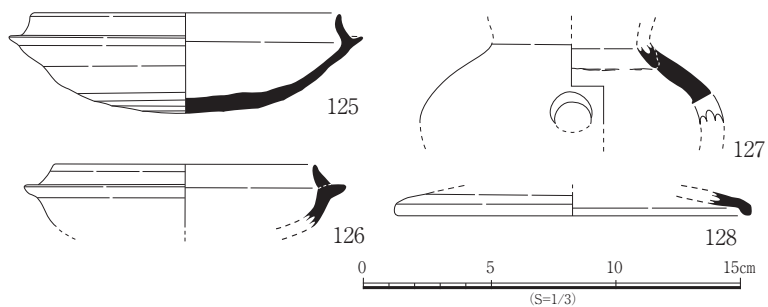


図28 塔心礎版築土出土遺物実測図

デ調整で、内底面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、内面は青灰色、外面は灰白色を呈する。126は口縁部付近のごく一部が残存し、口径10.3cm、立ち上り高0.8cm、受部径12.8cmを測る。立ち上りは短く内上方を向き、細く仕上げられた端部で上方を向く。器面は回転ナデ調整で、焼成は良く、青灰色を呈する。127は甕の肩部の細片で、径1.8cmの円孔上半が残る。器面は回転ナデ調整で、焼成は良く、内面は青灰色、外面は暗青灰色を呈する。128は杯蓋で、口縁部の一部が残存する。口径は16.0cm前後とみられる。天井部は平らに近いものとみられ、口縁端部は下方に小さく屈曲する。器面は摩耗が著しいが、内面には回転ナデ調整の痕跡が残る。焼成は不良で、内面が灰色ないし灰白色、外面が灰色を呈する。

3. 塔跡西部

塔跡西部では、8~10区からそれぞれ遺構が確認された。なお、前述のとおり9・10区については遺構の掘削を行っておらず、出土遺物もないため検出状態で推測されることについて記す。

(1) 8区(付図3)

比江廃寺跡の調査では初めての礎石建物2棟と堀跡1列および瓦片が比較的まとまって出土し瓦溜とみられる土坑2基、中世の井戸跡1基などが検出されている。

① 古代

i 礎石建物跡

いずれも礎石の掘り込み地業跡(壺地業)を確認している。調査は平面プランと上層の堆積状況を確認する程度で留めている。

3. 塔跡西部

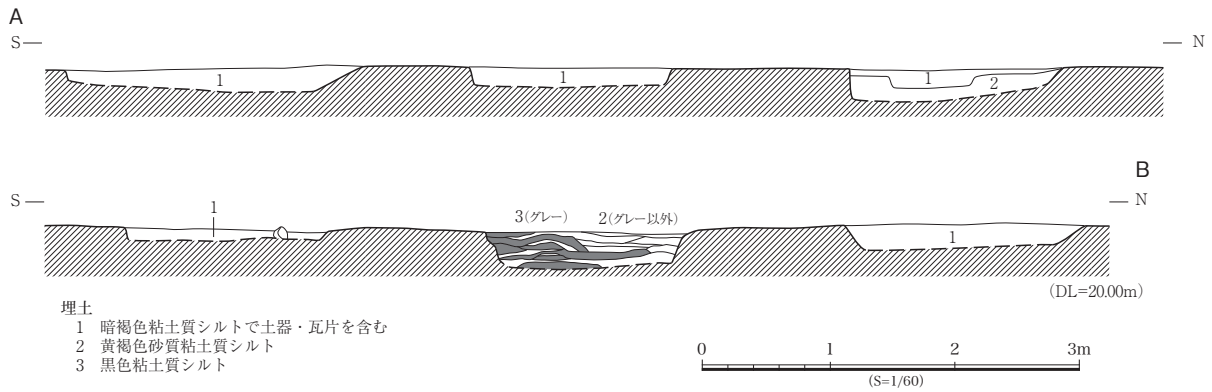


図29 SB-1

SB-1 (図29)

南北に5間分, 6個の礎石の掘り込み地業跡(壺地業)を検出した。柱間寸法は10尺(3.0m)等間隔で, 地業跡は大小みられるものの平面形は方形で, 大きいもので一辺2.2m, 小さいものでも一辺1.3mを測る。その方向は $N-1^{\circ}00'09''-W$ を示す。これら掘り込み地業は, 7区の第Ⅶ層ないし第Ⅷ層に相当する沖積堆積層を掘削し, 断面観察ではしっかりした版築を行っているものがある一方で, 簡易なものも見受けられる。礎石自体は確認されていないものこれらは礎石建物跡とみて間違いないであろう。

次に, 建物構造についてみる。8区の遺構検出状態をみると西に展開する可能性はなく, 東にその本体があるものと考えられる。北西隅の地業跡から東に繋がる地業跡が遺存していてもいいのであるが, 丁度, 近現在の攪乱と溝によって確認されていない。また, 南端の地業跡は他に比べ一回り大きく, 建物の南西隅に当たるものと考えられる。また, 遺物には弥生土器片100点, 土師器片4点, 瓦片6点, 須恵器片8点がみられるが, 何れも細片で図示できるものはなかった。

以上のように調査結果だけでは建物の棟方向を決めることはできないが, 今回確認した地業跡が側柱列とみるよりか妻柱列と考えた方が自然であるように思われ, また, 東西が8間であれば, 丁度, その中心が塔心礎の真北に当たる。このように推測すれば, この建物跡は金堂ないし講堂であった可能性も考慮され, 今回確認した建物は東西8間, 南北5間の礎石建物跡で, 棟方向は $N-88^{\circ}59'51''-E$ であると推測することもできよう。

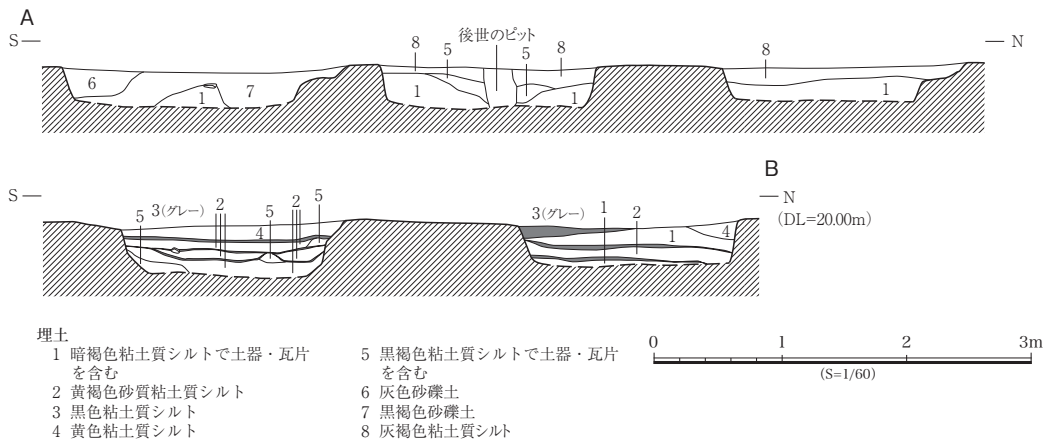


図30 SB-2

SB-2 (図30)

SB-1の西隣、南北に4間分、5個の礎石の壺地業跡(坪地業跡)を検出した。SB-1とは柱間が15尺(4.5m)間隔ではあるが壺地業の並びにずれがあり、その方向も約 4° ($3^{\circ} 51' 53''$)ずれていることから同一のものとは考え難い。柱間寸法は北側4個が10尺(3.0m)等間隔、南端とその北側が9尺(2.7m)で、壺地業跡は大小みられるものの平面形はほぼ方形で、大きいもので一辺2.0m、小さいものでも一辺1.1mを測り、SB-1よりやや小振りである。その方向は $N-2^{\circ} 51' 45''-E$ を示す。これら壺地業は、SB-1と全く同じ状況を示す。礎石自体は確認されていないもののSB-1同様礎石建物跡とみて間違いないであろう。

次に、建物構造について試みる。8区の遺構検出状態をみると東には展開しておらず、西にその本体があるものと考えられるものの、西側では関連する地業跡が検出できていない。また、南端の壺地業跡からさらに南に延びることも考慮されるが、関連の壺地業跡が検出されておらず、南北はこの4間で構成されていた建物とみることができる。遺物には弥生土器片48点、須恵器片7点、瓦片10点、土師器片1点がみられるが、大半が細片で図示できたものは古墳時代の土師器1点(図31-129)のみであった。

以上のように調査結果だけでは建物の棟方向を決することはできないが、SB-1と同じく今回確認した壺地業跡は側柱列とみるよりか妻柱列と考えた方が自然であるように思われ、今回確認した建物は東西5間程度で、南北4間の礎石建物跡で、棟方向は $N-87^{\circ} 8' 15''-W$ であると推察することもできよう。

出土遺物**土師器**(図31-129)

高杯の裾部の破片で、底径は16.8cmとみられる。大きく下外方へ開く裾部内面にはヨコ方向のハケ調整と端部にヘラ磨き、外面にはタテ方向のハケ調整の後に放射線状のヘラ磨きがそれぞれ施される。焼成は良く、浅黄橙色を呈する。

ii 堀跡**SA-1**

調査区北部、SB-1と一部重複する形で検出した堀跡と思われる柱穴列で、2個確認している。西側はSK-1と重なり、東側はSB-1および近現代の攪乱で検出されていない。建物跡になる可能性もあるが、北側および南側では関連する柱穴が検出されていないことから堀跡とした。柱穴は1.3~1.5mと大きく、柱間寸法は7尺(2.1m)を測り、方向は方眼北に垂直となる。土佐国衙跡の調査では、柱間寸法が8尺(2.4m)を測る建物⁽⁴⁾もみられたが、柱穴規模が1.0m以上のものはほとんどなく、それと比較しても規模の大きなものと推察される。また、柱痕も径0.5mと大きい。埋土は黒褐色粘土質シルトで、遺物は弥生土器片2点、須恵器片2点、瓦片1点などがみられたが、図示できるものはなかった。

これら建物跡と堀跡の関係は重複していることから一定の時期差が考えられ、その方向からすると真北に最も近いSA-1が最も古く、SB-1、そしてSB-2の順になると考えられる。

iii 土坑**SK-1**

調査区北西部で検出した瓦片が集中する土坑で、瓦溜とみられる。土坑は溝状を呈し、西側調査区

3. 塔跡西部

外に延びる。検出長は4.3m，幅2.9m，深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであった。遺物には多数の瓦片がみられたが，大半が細片で図示できたものは瓦2点(図31-130・131)であった。

出土遺物

瓦(図31-130・131)

130は軒丸瓦で，中房と外区約1/2が欠損する。瓦当復元径は21.4cm，弁区径は17.0cm，中房径は8.0cm，外縁高は2.6cm，厚さ3.9cmを測る。内区には8葉の無子葉単弁蓮華文が施され，外区は内外縁の区別がなく，外縁は斜縁で鋸歯文がみられ，間弁は楔状をなす。焼成は良く，にぶい黄橙色を呈する。131は鬼瓦の破片⁽⁵⁾で，外面には高さ0.5cm前後の立方体の凸起が3カ所，その痕跡が3カ所に残る。厚さ2.7cmで，残存長9.0cmを測る。焼成は良く，にぶい赤褐色を呈する。

SK-2

西壁沿いで検出した瓦と礫がまとまって出土した土坑で，西側調査区外に続く。規模は南北16.7m，東西2.0m以上，深さは0.3mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであった。土坑は二段堀のようになっており，低い部分から多くの瓦と礫がまとまって出土しているが，復元図示できるものはなかった。

② 中世

i 井戸跡

SE-1

南東端部で検出した井戸跡で，上面では礫を投棄した状態となっていた。平面形は不整円形で径約

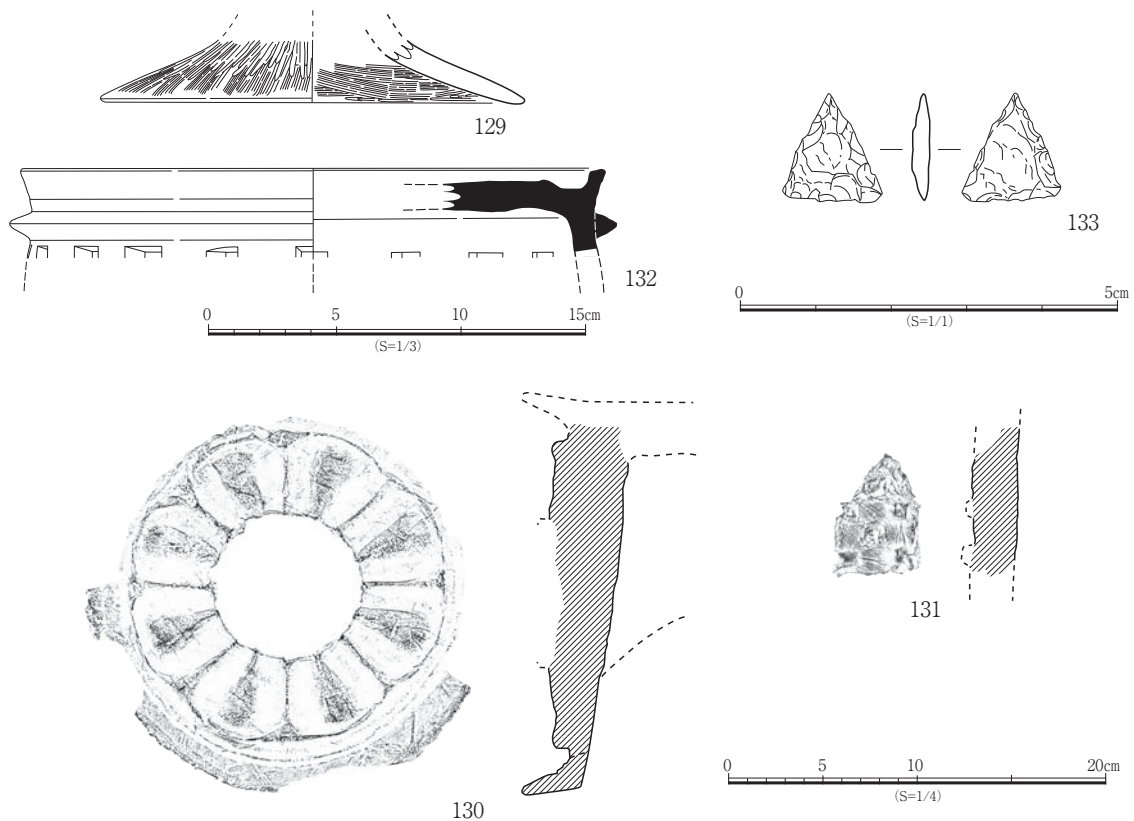


図31 8区出土遺物実測図

5.0mを測る。埋土は灰褐色粘土質シルトで礫を多く含んでいた。遺物は、石臼・礫に混じって、瓦片が中心に出土しているが、比江廃寺跡初出土となる円面硯(図31-132)と石鏃(図31-133)の2点が図示できた。

出土遺物

須恵器(図31-132)

円面硯で、脚台部を除く約1/5が残存するもので、比江廃寺跡では初の出土となる。口径23.0cm, 陸部径18.4cmを測る。海部は陸部より0.3cm深く、外堤は高さ1.0cmを測り、外面外堤下には断面三角形の凸帯が巡る。脚台部には長方形の透しが24ヵ所に穿孔されていたものと思われる。

石製品(図31-133)

小型の石鏃で、三角形を呈し、石材はサヌカイトである。全長1.4cm, 全幅1.3cm, 全厚0.2cm, 重さ0.4gを測り、剥離は縁辺部のみに施される。

③ その他の遺構

前述のとおり、遺構の掘削は最小限度に止めているため、時期が判明していないものもある。また、北東部では近現代とされる土坑状の攪乱と東壁沿いで溝状の攪乱がみられた。

(2) 9区(付図4)

礎石建物跡とみられる根石を伴う柱列の痕跡を検出しているものの時期の決め手に欠ける。よって、SB-3としてその性格について検討する。

① 検出遺構

i 礎石建物跡

SB-3

調査区北側で検出した礎石建物跡とみられる根石を伴う柱列の痕跡である。検出状態では明確な建物を復元できないが、東西5間(9.0m), 南北2間(3.0m)の東西棟建物ではなかったかと推察される。柱間寸法は桁行が1.8m等間隔で、梁行は1.0~2.0mとみられ、その痕跡は一辺0.5~0.7mを測る。

検出された痕跡はほとんどが南側であり、実際どのような建物であったかこの調査では判然としない。また、これ以外にも根石を伴う痕跡が3ヵ所で検出されており、この建物以外にも礎石建物が存在していたものとみられる。

② その他の遺構

北側と南側のサブトレンチからそれぞれピット状の遺構2個を検出している。柱穴の可能性も考えられるが、南側では盛土を除去していないこともあったその状況は不明と言わざるをえない。

(3) 10区(付図4)

本調査区では、中世と考えられる溝状遺構1条, 土坑1基, ピット14個を検出している。掘削していないため、SK-3, SD-4, ピットとしてその性格について検討する。

① 検出遺構

i 土坑

SK-3

調査区東側でSD-4に切られた形で検出している不整形の土坑である。長軸方向2.7m, 短辺0.5m以上を測る。埋土は灰褐色粘土質シルトである。

3. 塔跡西部

ii 溝跡

SD-4

調査区に沿って、検出している溝跡で、検出長約11.8m、幅0.4～1.0mを測り、東で南に、西で北にほぼ直角に曲り、さらに続く。この検出状況から判断すると屋敷等の区画溝の可能性が強そうである。なお、埋土は灰褐色粘土質シルトである。

② その他の遺構

ピットを14個検出しており、その多くは掘立柱建物の柱穴とみられる。埋土は灰褐色粘土質シルトである。

註

- (1) 比江廃寺跡出土の軒丸瓦はいずれも外区に内外縁の別がなく、かつ県内でも外区に内縁と外縁を別にしたものは確認されていない。
- (2) 比江廃寺跡出土の軒平瓦の瓦当文様には重弧文と忍冬唐草文があり、後者ではいずれも均整唐草文となっている。
- (3) 土佐国衙跡の調査において堆積状況の良好な部分では一般に以下のような堆積を示す。

第Ⅰ層：表土層

第Ⅱ層：床土

第Ⅲ層：褐灰色粘土質シルト層(中世の遺物包含層)

第Ⅳ層：黒褐色粘土質シルト(弥生～古代の遺物包含層)

第Ⅴ層：黒色粘土質シルト層(黒ボクを多量に含む無遺物層)

第Ⅵ層：明赤褐色～赤褐色シルト層(アカホヤ火山灰層)

第Ⅶ層：にぶい黄褐色～褐色礫粘土質シルト

第Ⅷ層：砂礫層(沖積層)

よって、この層は第Ⅳ層に相当するものと判断される。また、昭和44年度の調査でB2としたものは基本的には第Ⅴ層の無遺物層に相当するとみられるが、報告では土器片を含むとされる。しかし、実際、第Ⅳ層と第Ⅴ層を平面的に識別することは非常に難しく、場合によっては上層からの混入と誤認していたのではなかろうか。

- (4) 土佐国衙跡の第23次発掘調査(高知県教育委員会 1990『土佐国衙跡発掘調査報告書』第10集)のSB-62は、桁行の柱間寸法が6尺(1.8m)～8尺(2.4m)、SB-63も梁行の柱間寸法が8尺(2.4m)～8.5尺(2.55m)であった。
- (5) 岡本健児 1987「第六 土佐」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道 吉川弘文館の333頁「第187図 比江廃寺出土の鬼瓦」として紹介されているものに復元される。

参考文献

- 高知県教育委員会 1970『高知県比江廃寺塔跡』-高知県文化財調査報告書第16集-
- 高知県教育委員会 1991『比江廃寺跡発掘調査概報』-高知県文化財調査報告書第33集-
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『野田遺跡Ⅰ』
- 土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』
- 奈半利町教育委員会 2003『コゴロク遺跡群』
- 廣田佳久 1993「伏原大塚古墳」『土佐史談』第192号
- 廣田佳久 2000「南四国における古代末の土器様相-素焼土器を中心に-」『考古学論究』第7号 立正大学考古学研究会

第V章 考察

比江廃寺跡については、塔心礎が昭和9年に国の史跡になって以来、重要遺跡の一つとしてこれまでに5次の発掘調査が行われ、その性格などについてはたびたび俎上にも上っている。しかし、伽藍配置など判明していないことも多く、ベールに包まれている部分も少なからずある。ここでは、これまでの調査結果を踏まえ、今回の調査から考え得る比江廃寺像について考察し、まとめとしたい。

1. 伽藍配置

これまで比江廃寺の伽藍配置については、周辺の地形から四天王寺式伽藍配置(岡本 1959)、塔心礎が原位置を保っていること、周辺の微地形および瓦の系譜と出土地点を考慮して法隆寺式伽藍配置(岡本 1968, 高知県 1970)と推測されていた。しかし、今回8区から礎石の壺地業跡が確認されるに至り、この礎石建物が塔跡の北側に並列していた可能性があることから法隆寺式伽藍配置とは考えられなくなった。

まず、8区で検出されたSB-1について検証してみる。柱間寸法は3.00m(10尺)等間隔で、5間分が検出されている。総地業の痕跡は確認されていないもののII A類(山中 2003)と判断される礎石の掘り込み地業跡(壺地業)が検出されていること、土佐国衙跡で確認されている掘立柱建物の中で最大のものでも2.55m(8.5尺)(高知県 1990, 廣田 1996)であることから確認された遺構は掘立柱建物ではなく礎石建物であると判断された。棟方向については、今回の調査では断定することができないものの、塔跡との位置関係からすると今回検出した部分は西妻柱列の可能性が高く、南北棟ではなく東西棟の礎石建物と推察される。以上のことから考慮するとSB-1は伽藍配置の主要建物の一部とみることもできよう。また、その規模は塔との位置関係を考慮して東西8間、南北5間の規模であったものと推察される。

一方、SB-1の西側約4.50m(柱間)で検出したSB-2は、柱間寸法は2.70(9尺)~3.00m(10尺)で、4間分が検出されている。SB-1と同じく掘り込み地業(壺地業)が行われており、SB-2も礎石建物であったものと思われる。棟方向については、SB-1同様今回の調査では断定することはできないものの、南北とも続きが検出されていないことから東西棟と考えた方が妥当と思われ、SB-1同様東西棟で、今回検出した部分は東妻柱列であった可能性が高い。また、SB-1とは棟方向が約4度(3°51'53")ずれていることから一定の時期差が看取され、SB-1の方が真北(GNに対し-0°05'06")に近いことからSB-2はSB-1より後出とみることもできる。ただし、大きな時期の隔たりはないものと考えられる。また、規模的にはSB-1より一回り小さい、東西5間、南北4間の規模であったと推察される。

この2棟が如何なる性格の建物であったか結論付ける資料は確認されておらず、推測の域を脱しないが、いずれも礎石建物であることを考慮すると比江廃寺の主要建物であったことには大過なからう。塔以外の主要建物と言えば金堂や講堂が考えられ、この2棟は、このいずれかに該当する可能性が少なからずある。塔の北側に主要建物を配する伽藍配置には飛鳥寺式や四天王寺式があるが、このような一般的な伽藍配置に拘ることはないのではなからうか。土佐のような遠流の地の寺院であり、地形に合わせた独自の伽藍配置でも何ら問題はないように思われる。

1. 伽藍配置

時代は少し遡るが、今回の調査では県内の遺跡で2例目となる円筒埴輪片が出土している。伏原大塚古墳のそれと形態、調整が全く同じもの(土佐山田町 1993, 廣田 1993)である。換言すれば、正に伏原大塚古墳の埴輪である。なぜ、その埴輪がこの比江廃寺跡から出土したのか推測の域をでないもの、伏原大塚古墳では少なくとも7世紀前半⁽¹⁾まで追葬が行われており、伏原大塚古墳を築造した末裔が関係している可能性もあるのではなかろうか。一方、この比江地区では古墳は確認されておらず、周辺古墳からもたらされたとは考え難い。

比江廃寺は在地豪族の氏寺として創建されたと想定されている。その豪族とは四国最大の大型方墳を築造し得た豪族の末裔であったかもしれない。換言すれば、県内で逸早く寺院を建立できたのは、香長平野を統括していた豪族であろう。

2. 寺域

平成2年度の調査の際(高知県 1991)、確認されているS区の溝(SD1・2)と今回検出したSD-1・2との関連が注目される。何れも南北溝で、同一の可能性が高く、東限を区画していた可能性があり、寺域に一つの示唆を与える資料ではなかろうか。規模的な問題等課題は残るものの当該期、方向を同じくする数少ない遺構の一つである。

具体的にみても、まず、平成2年度のS区の溝は、全く出土遺物がなく時期は不明とされている。一方、今回の溝(SD-2)からは10世紀前半とみられる遺物が投棄された状態でまとも出土しており、その廃絶時期が土佐国衙の衰退期とほぼ重なっている。埋土からすると流水の痕跡はなく、通常は空堀的な状態であったものと推察され、かつ、平面図からは掘り返しや拡張痕跡が認められ、比較的長期間に互って使用された可能性がある。掘削時期を決することは難しいが、瓦類や灯明皿が比較的多く出土していることもあり、寺院と無関係な遺構とは考え難い。また、西側で確認した溝跡(SD-1)とは約3.00m(10尺)間隔で並走した状態になっており、関連が考慮される。S区の溝の資料は乏しいものの今回の溝と同一であった可能性もその位置関係から十分考えられるのではなかろうか。同一の溝であったとするなら75.00m以上を測る。この状況から東限を区画していた溝と積極的に評価することはできないであろうか。西限を推測し得る遺構は確認されていないが、SD-2が東限を画していたとすれば、塔心礎との位置関係から東西幅は300尺(90.00m)以内と推測される。

一方、SD-2以東でも遺構が検出され、標高も塔跡周辺とほとんど同じであることから、東限がさらに東にあった可能性も残る。何れにしても、このSD-1・2が比江廃寺の何らかの区画に関係した溝とみて大過ないものと考えられる。

3. 塔心礎と塔跡

塔心礎と塔跡については前回の調査と今回の調査によって、その概要をほぼ知ることができるようになった。中でも、塔心礎の版築土から出土した第IV型式の須恵器⁽²⁾によってその建立時期が推測できるようになった。

まず、塔心礎は、完新世に形成された沖積面と更新世の中位下段丘面の南東側を掘削した上で、北西側を自然堆積面に据え、掘削した南東側を中心に版築している。このことから塔心礎は南東側か

ら搬入され据えられた蓋然性が高い。

そして、版築土から8世紀代の須恵器(128)が出土したことにより、建立はそれ以降で、7世紀には遡り得ない。また、版築土から瓦の細片が出土していることもそれを物語っている。寺の創建が7世紀代であったとしても伽藍が整うには、少なくとも中央寺院が要した創建の発願から完成までの期間(大脇 1993)程度は要したのではなかろうか。完成した塔の規模については、昭和44年度の発掘調査の結果、一辺38尺(11.40m)程度と推測されるも、基壇やその地業痕跡は確認されておらず、定かではない。

一方、現存し、国の史跡となる塔心礎の大きさは、全長3.24m、全幅2.21m、全厚約1.80mを測り、上面ほぼ中央部に径0.81m、深さ0.10mの柱穴を穿孔した上で、その中央やや北よりに径0.20m、深さ0.12mの舍利孔を設けている。石種は石英が目立つ中粒砂岩で、淡茶褐色を呈し、石英、長石、泥岩で構成(奥田 2006)され、岩相は四万十帯のそれに似ており、周辺から調達されたものと考えられる。また、この柱穴の径から塔の高さは約32m(岡本 1968)と推測されている。大きさでは、四国の国分寺に残る塔心礎と較べても遜色なく、土佐国分寺の塔心礎³⁾より遥かに大きく、逆であったとしても不思議ではない。

このような塔心礎を構える塔の存在からすると他国の国分寺と肩を並べる伽藍を備える寺院であったとも推測し得るが、それを裏付ける資料は出土していない。

4. 遺物—土師質土器と瓦について—

今回の調査で出土した遺物のうち、比江廃寺に関係したとみられるものは瓦とSD-2に投棄されていた一連の遺物で、比江廃寺が存続していたとみられる時期、中でも8～9世紀代の食膳具の出土が極めて少なく、その様相について記すことはできないが、SD-2に投棄された遺物、特に出土量が多かった土師質土器とこれまでに出土している瓦についてみてみたい。

前章で記したように、器高指数によって、皿で2種2形態、杯で3種3形態に分類することができる。口縁部の形態には古相とみられる口縁内面に折り込みの痕跡が残るものもみられるが、出土状況からするとほぼ同時期と捉えることが可能である。また、小皿が出土していない点と成形技法がいずれもA技法で底部の切り離しが回転ヘラ切りであることから考えて10世紀前半の範疇で捉えられるものである。よって、溝が廃絶するのがこの時期であろう。他方、10世紀後半とみられる遺物も出土していることから溝が完全に埋まってしまうのは廃絶から時期が少し下りそうである。

一方、瓦は、出土点数自体は多かったものの、今回図示できた瓦当は5点のみで、大半が丸・平瓦の細片であった。これだけでは云々できないが、これまでに出土している瓦も含め少し所見を記してみたい。なお、丸瓦は無段式と有段式(昭和44年の調査)のいずれも出土する。

まず、軒丸瓦についてみると、瓦当の大きさでは、花卉の一葉のみに子葉を配した輪郭単弁八葉蓮華文(稲垣 1987、高知県 1991)と後述の蓮子が楕円形をなすもの以外、径は20cmを超えるものがほとんどで、全体に大振りであり、新相を示している。外区は内外縁の区別がなく、比較的高く、鋸歯文を施した斜縁も散見される。中房は直径の約1/3以上と大きく、かつ、弁区より一段高くなり、先の軒丸及び蓮子が楕円形をなし放射線状に配されたもの⁴⁾以外は蓮子が二重構成となる。ただし、法隆寺西院や川原寺の中房のようなあり方ではない。外区が外縁と内縁に分れていない点は古相を

示す一方、中房の形態は新相を示している。そして、弁区には川原寺式系、法隆寺式系、高句麗様式(稲垣 1987)、そして、前述の蓮弁が模式化した軒丸瓦がみられるが、いずれも垂流と考えられ、古相、新相が入り交じった瓦当となっている。稲垣氏の言葉を借りるなら正に換骨奪胎と表現できるものである。ただ、法隆寺式系としたものの中には法輪寺式のもの、中でも後述する軒平瓦に均整忍冬唐草文がみられることから創建が7世紀に遡り得ることにもなろう。しかし、それ以外は8世紀代とみることが妥当ではなかろうか。また、秦泉寺廃寺(高知市 1984)、大寺廃寺(岡本 1968)、野田廃寺(高知埋文 2005)からは、花卉先端の反り返りの表現が肉厚なもので、花卉中央に1条の凸帯を伴い、間弁が楔形をなし、中房が直径の約1/5で盛り上がった瓦当が出土している。花卉の表現は百済末期の影響を窺わせるもので、軽寺式系(大和軽寺跡)と考えられ、伊賀三田廃寺(上原 1997)からは酷似する瓦当が出土している。ただ、花卉先端の表現がより形式化、形骸化しており、後出であろう。これ以外にも野中廃寺やコゴロク廃寺などから別系統の瓦当が出土しているが別稿に譲る。

軒平瓦は、いずれも周縁には文様を持たず、瓦当に重弧文か唐草文を配する。比江廃寺からは三〜四重弧文がみられ、時期決定の一つの目安⁽⁵⁾となっている。一方、唐草文にはいずれも法隆寺式系とみられる均整唐草文がみられ、中心飾と左右に配置されたパルメットの形態によって大きく2つ

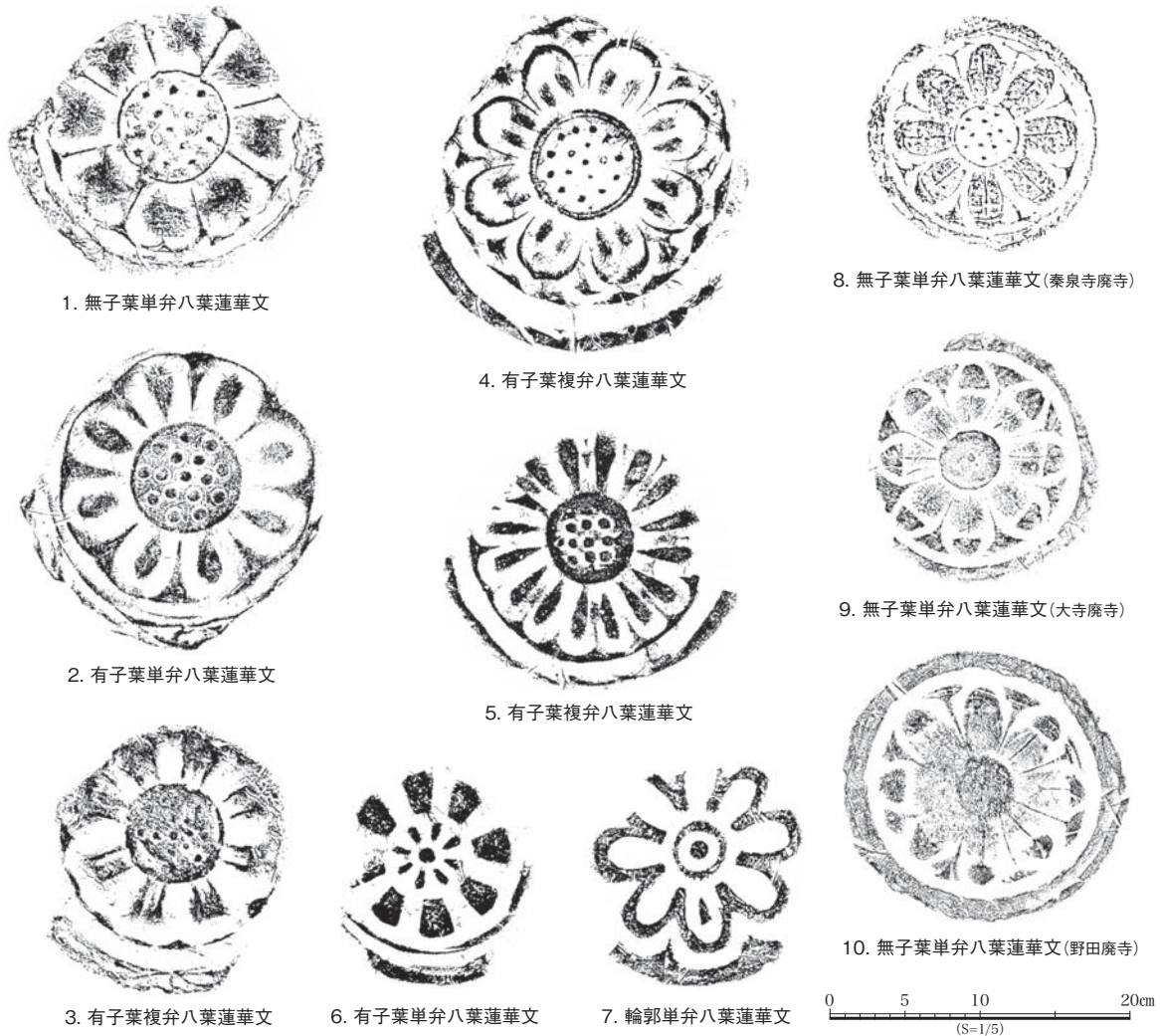


図32 比江廃寺跡・その他寺院跡出土軒丸瓦

に分類できる。一つは、蕾の上部に凸帯が付き、花蕊がハート形をなすもので、その下端から左右に展開するパルメットの茎や葉の形状は法隆寺式系(森 1974・1989)を彷彿さす。もう一つは、中心飾がさらに形式化したもので、蕾は上部が尖り宝珠形をなし、花蕊は上部が開く蕨手で、左右には形式化したパルメットが展開する。後者には厚さによってさらに二つに分か

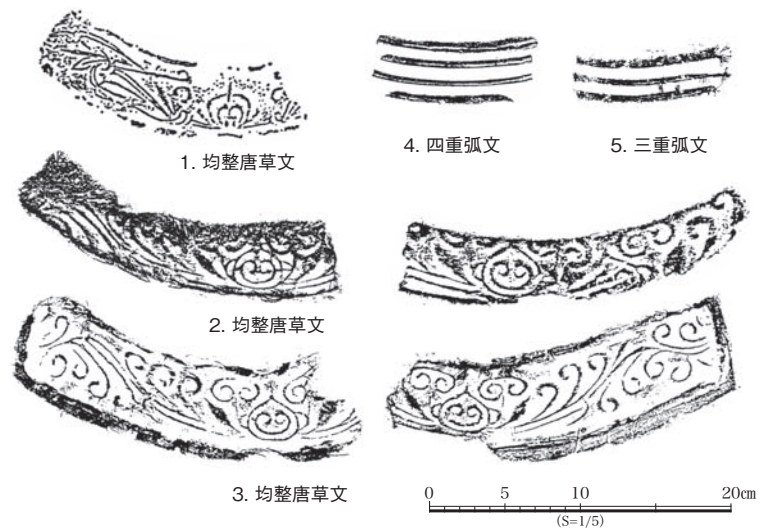


図33 比江廃寺跡出土軒平瓦

れる(高知県 1991)。前者は7世紀代に遡り得る資料であろう。一方、後者は8世紀代に位置付けられる。

このように7世紀代に遡り得る瓦も存在するものの、その多くは8世紀以降のものともみられ、創建当時の堂宇は金堂など限られていたのではなかろうか。

5. 性格と存続時期

墨書土器など性格を明らかにする資料は出土していないが、叙上の考察を踏まえて探してみたい。

まず、在地豪族の氏寺としての創建の発願は7世紀代に遡り得るものの、塔が建立され伽藍が整うのは8世紀代、中でも中葉以降ではなかろうか。この時期は土佐国府跡でも遺構数や遺物量が増加し始める時期に当たり、平安時代前半にかけて最盛期を迎える。正にこれに呼応するように寺も栄えたものと推察される。しかし、それ以降土佐国府跡では徐々に遺構・遺物の減少がみられ、衰退傾向が看取される(廣田 1996)。

一方、比江廃寺では、それを資料で追うことはできないものの、10世紀前半期に遺物の一括投棄が行われている。これは、寺の終焉を示しているのではなかろうか。次に、目立って出土する遺物は13世紀以降であり、その間が空白となっている。このことはそれを裏付けているようである。

その性格については、これまでいろいろと意見が出されている。

豪族の氏寺として創建された点については、特に異論は出されていないもののその後の性格についてはいくつかの考えが提示されている。一つは国府寺(国府付属寺院)に転用されたとするもの(岡本 1959, 廣田 1990)である。比江廃寺が土佐国府の丁度北東部、鬼門に位置することが大きな要因である。

もう一つは国分尼寺に転用されたとする意見(安岡・山本 1959, 岡本 1968)である。比江廃寺から土佐国分寺の瓦と同范のものが出土していることと地名に国分尼寺に関係したホノギ⁽⁶⁾があることを理由にしている。

前述のとおり比江廃寺の性格を類推し得る墨書土器などは出土しておらず、現段階で断定することはできないが、今回の調査で出土した須恵器から塔の建立時期が推察されること及び塔の焼失した痕跡が確認されていないことからすると塔は一定期間存続していた蓋然性が高い。土佐国分尼寺の造営

5. 性格と存続時期

に関する文献資料は残っていないものの造営の詔からして一般的には遅くとも8世紀後半には土佐国でも存在していたもの⁽⁷⁾と考えられている。そうなると塔と国分尼寺が併存していたこととなろう。

また、地方の国分尼寺の主な伽藍は金堂と講堂⁽⁸⁾であり、塔を有する国分尼寺は通常みられない。

これらのことを総合すると後者の可能性は低いように思われる。一方、国府寺の存在自体を疑問視する考え(木下1988)もあり、これ以外の性格⁽⁹⁾も考慮しなければならないのかもしれない。

6. その他の遺構と遺物

比江廃寺関係以外の遺構・遺物は、大きく弥生時代後期後半～末⁽¹⁰⁾、古墳時代後期、中世に分けることができる。まず、弥生時代後期後半～末の遺構は今回も確認されているように、この地で初めて集落が形成された時期と捉えることができる⁽¹¹⁾。県内一円に集落がみられる時期でもある。そして、よく目にする遺物に第Ⅱ-4型式の須恵器⁽¹²⁾がある。遺構としては第Ⅱ-3・4型式の須恵器を伴う住居跡が土佐国衙跡から確認されていることから、この比江廃寺跡が立地する段丘上でも集落が営まれていたことが考えられる。丁度周辺の丘陵部で古墳が盛んに築造された時期でもある。

比江廃寺がこれらの集落を削平して創建されたために、壺地業の版築土等にそれらの遺物が混入したのであろう。また、それらの遺物の中に第Ⅲ型式の須恵器が見られない点が創建時期を遡らせる一つの要因ともなっていた。

鎌倉時代になっても少なからず遺構・遺物が確認されている。今回の調査では明確な資料の出土はみられなかったものの、土佐国衙跡南部では古代の遺構・遺物より占める割合が高くなっており、引き続き守護所が設置されていた可能性があり、比江廃寺周辺でも集落が営まれていたのであろう。続く室町時代は、守護所が田村に設けられたのに伴い遺構・遺物の出土頻度は低くなるものの、今回の調査でもその時期の遺物が出土しており、一定集落が継続していたものと考えられる。

このように、比江廃寺跡の創建には前代の集落を削平し整地したことが窺え、廃絶後も比江地区には継続して集落が営まれている。

7. おわりに

今回の調査では、比江廃寺の主要建物と考えられる2棟の礎石建物跡などを検出した。その性格について言及し得る具体的資料の検出までには至っていないものの、帰納的にその性格について推考してみた。果たしてその実体は如何なるものであろうか。まだ、周辺部には比江廃寺解明の手掛かりが残っているはずであり、今後も継続的な確認調査の必要性を痛感する。また、昭和44年度の調査報告を読み返すにつけ、地質学との連携の重要性を再認識した。中でも、第四紀の研究者とのタイアップが古環境復元には不可欠であると共に発掘調査に携わる者は、地質と土壌に対する十分な認識と知識を持って遺跡に向き合わなければならないことを痛感する。

一方、後世の削平等も看取される上に周辺部は宅地化が進み、当時の面影を留めるのは塔心礎のみである。今後果たして、その実像を明らかにすることはできるのであろうかと言う懸念もある。調査から十年以上が経った上に限られた調査資料の中で、検出された遺構・遺物を積極的に評価してきたが、推測の域を脱し得ない事柄も多い。土佐国衙跡についても国庁跡の確認には至っておらず、

各地で史跡整備が進む中、課題は山積している。

今後は、これまで以上に真摯にそして地道に遺跡に向かい合っていくことが埋蔵文化財に携わる者には求められる。

註

- (1) 須恵器の形態からすると塔心礎の版築土(黒色土)から出土した須恵器とほぼ同時期である。
- (2) 陶邑で言う4段階の須恵器で、杯蓋のかえりが消失する時期の型式である。
- (3) 石種はチャートで、現在は庭石に転用され、立った状態で据えられており、全幅1.20m以上(地表下に埋もれているため実施の大きさは不明であるが、全長は1.50m前後ではないかとみられる。)、短辺1.10m、厚さ0.70mを測り、上面ほぼ中央に径0.68m、深さ5.5cmの柱穴を穿穴し、排水溝を設ける。柱穴のほぼ真中に径0.20m、深さ6cmの舍利孔が見られる。なお、この舍利孔については、心柱の柄穴であるとの見解(岡本1968)もある。いずれにしても、推測される重量は十分の一以下になる。
- (4) 高知県 1991『比江廃寺跡発掘調査概要』で確認されたもので、淡路国分寺(岡本1987)と讃岐国分寺(松本1987)に類例があり、多賀城出土の単弁蓮華文軒丸瓦(歴博2006)の中房にも楕円形を呈する蓮子がみられる。また、報告では統一新羅系と考えられており、統一新羅時代の蓮弁軒丸瓦の中房に楕円形の蓮子が付くもの(歴博2006)がある。なお、蓮子の子葉は、一見無子葉のようにみられるが、実際は、蓮弁の輪郭と僅かな高まりが残っていることから子葉が異様に発達したものと考えられる。図32の2・3・5も同様に子葉が発達している。
- (5) 重弧文軒平瓦は白鳳時代全般を通してみられる文様であるが、古くは飛鳥時代から見られ、地域によっては8世紀に入ってもみられる(森1989)ことから、一つの目安とはなり得るも、決め手とはならない。
- (6) 岡本健児 1968『高知県史 考古編』高知県、岡本健児 1987「第六 土佐」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道吉川弘文館にその経緯と理由が述べられている。ただ、言えるのは、比江地区には古代名称である「内裏」「国庁」などそのものの地名が残っているが、そこには該当する遺構が存在しないこと、そしてヤシキ地名に代表されるような中世名称が散見されることである。古代から中世前半まで土佐の中心地であったことが却って地名の移動や変更を促したものと思われる。
- (7) ただし、詔が出てから造営に着手し、伽藍が整備されるまでにどれだけの期間を要したか十分吟味する必要があるように思う。前述のように数十年を要した寺院があり、かつ、天平宝字七年(763)～延暦三年(784)の官

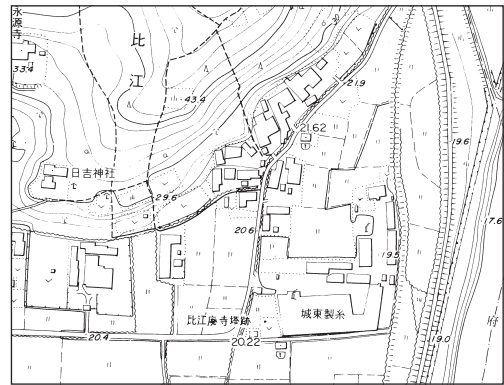


図34 昭和44年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)

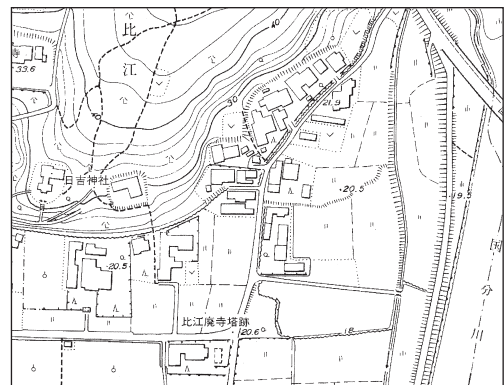


図35 平成3年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)

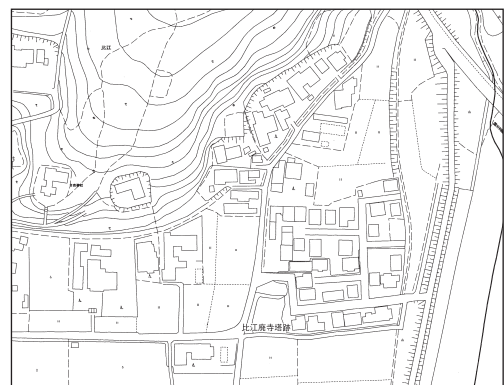


図36 平成16年の比江廃寺跡周辺(S=1/5,000)

7. おわりに

符類に造畢と記されている国もあることからして、土佐国分寺の完成時期も検討を要するのではなかろうか。なお、先行寺院については別途検討する必要があるだろう。

- (8) 尼寺の総本山である法華寺はかつて東西塔があり、各国の国分尼寺には塔がつくべきであるとの意見(森・坂詰 1991)もある。
- (9) 郡寺もその性格等について種々の見解(山中 2005)があり、古代官寺も大寺、国分寺、定額寺に分れている。
- (10) 一部古墳時代初めを含む可能性もあるが、当該期の古墳は少なくとも高知平野(土佐国)では発見されていない。
- (11) 平成2年度の調査では弥生時代前期新段階の遺物が出土しており、集落の形成がその時期に遡る可能性もある。
- (12) 廣田佳久 1995「南四国の須恵器－周辺地域における須恵器の変遷－」『王朝の考古学』雄山閣で記しているように、所謂古墳時代後期の須恵器の型式であり、第Ⅲ型式の須恵器(陶邑の3段階に対応した杯の蓋にかえりが見られる段階)と伴出する例もあり、併存していたことも考慮される。

参考文献

- 稲垣晋也 1987「第六 南海道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道 吉川弘文館
- 上原真人 1997『歴史発掘① 瓦を読む』講談社
- 大脇潔 1993「七堂伽藍の建設」『古代史復元3－古代の宮殿と寺院』講談社
- 岡本健児 1959『高知県の考古学』吉川弘文館
- 岡本健児 1968『高知県史 考古編』高知県
- 岡本健児 1987「第六 高知」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道 吉川弘文館
- 岡本稔 1987「第二 淡路 二 国分寺 二」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道 吉川弘文館
- 奥田尚 2006「四国の国分寺跡の心礎の石種」『古代学研究』第172号 古代学研究会
- 木下良 1988『国府』歴史新書=44 教育社
- 高知県教育委員会 1970『高知県比江廃寺塔跡』－高知県文化財調査報告書第16集－
- 高知県教育委員会 1990『土佐国衙跡発掘調査報告書』第10集
- 高知県教育委員会 1991『比江廃寺跡発掘調査概要』－高知県文化財調査報告書第33集－
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2005『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』
- 高知市教育委員会 1984『秦泉寺廃寺跡』第3次調査 他
- 国立歴史民俗博物館 2006『瓦コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録4
- 森郁夫 1974「瓦の様式と伝播」『古代史発掘⑨－埋もれた宮殿と寺』講談社
- 森郁夫 1989『瓦』考古学ライブラリー43 ニューサイエンス社
- 森郁夫・坂詰秀一 1991「対談 古代の伽藍を語る」『季刊 考古学』第34号 特集 古代仏教の考古学
- 廣田佳久 1993「伏原大塚古墳」『土佐史談』第192号
- 廣田佳久 1996「土佐国衙跡の調査研究の現状と課題」『考古学の諸相』
- 松本豊胤 1987「第四 讃岐」『新修国分寺の研究』第五卷上 南海道 吉川弘文館
- 安岡源一・山本大 1959『岡豊村史』
- 土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』
- 山中敏史 2003「Ⅲ－7 礎石下の基礎地業工法」『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構 奈良文化財研究所
- 山中敏史 2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題－氏寺論の再検討－」『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心に－』奈良文化財研究所

圖 版



比江麿寺跡・土佐国府跡・土佐国分寺周辺航空写真（「国土画像情報（カラー空中写真） 国土交通省」）

図版 2



1区-2・3 遺構検出状態(北より)



1区-4 遺構検出状態(北より)



1区-2~4 遺構完掘状態(南より)



1区-4 遺構完掘状態(北より)

図版 4



1区-2 SD-2検出状態(南より)



1区-2 SD-2完掘状態(南より)



1区-2 SD-2遺物出土状態(南東より)



1区-2 SD-2遺物出土状態(北より)

図版 6



1区-4 ST-1・2, SD-3完掘状態(西より)



1区-4 SD-3遺物出土状態(西より)



1区-5 遺構検出状態(西より)



5区 完掘状態(西より)

図版 8



6区 完掘状態(南より)



7区 塔心礎(南東より)



7区 東トレンチ(南東より)



7区 東トレンチセクション1(南東より)

図版 10



7区 東トレンチセクション2(南より)



7区 東トレンチセクション3(南より)



7区 拡張区(南西より)



7区 南トレンチ(南西より)

図版 12



7区 西トレンチ1(北より)



7区 西トレンチ2(北東より)



8区 遺構検出状態(南より)



8区 遺構完掘状態(南より)



8区 根石検出状態(東より)



8区 壺地業検出状態(東より)



8区 SB-1(北隅から1間目)壺地業セクション(東より)



8区 SK-1遺物出土状態(東より)

図版 16



9区 全景(北より)



10区 遺構検出状態(東より)



軒丸瓦



丸瓦



軒平瓦



平瓦



土師器(甕)



土師器(羽釜)



須恵器 (円面碗)



須恵器 (円面碗)



丸瓦, 平瓦



弥生土器(支脚), 土師器(小型丸底卮), 須惠器(双耳壺·杯蓋), 瓦(軒丸瓦·鬼瓦)



備前焼(播鉢), 土製品(土鉢), 瓦質土器(鍋), 緑釉陶器(椀), 弥生土器(鉢・壺・甕)

图版 24



弥生土器(鉢), 土師器(器台・碗・高杯・甕), 瓦(軒丸瓦), 須恵器(短頸壺), 緑釉陶器(碗)



土師器(甕・羽釜・高杯), 須恵器(甗)



土師質土器(羽釜・皿), 弥生土器(鉢), 円筒埴輪, 須恵器(杯身・杯)



土師質土器(皿・杯)



土師質土器(杯)



土師質土器(杯)

图版 30



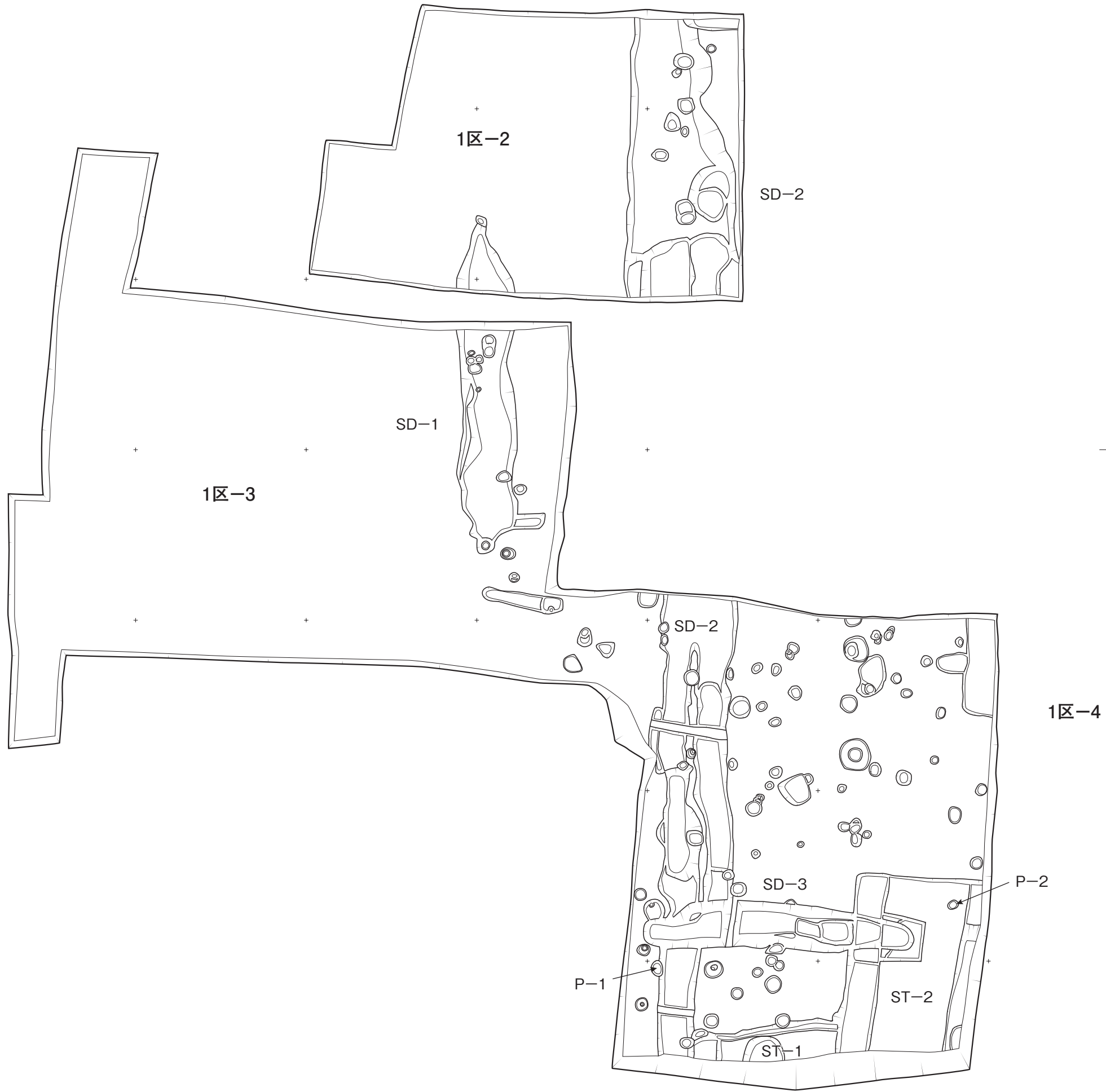
土師質土器(杯·碗), 黑色土器(碗), 須惠器(杯身), 石製品(石鏃)

報告書抄録

ふりがな		ひえはいじあとさん						
書名		比江廃寺跡Ⅲ						
副書名		平成6・7年度の確認調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第97集						
編著者名		廣田佳久						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原南泉 1437-1						
発行年月日		2007年2月23日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひえはいじあと 比江廃寺跡	〒783-0054 高知県南国市 比江字土居屋敷・ 北口ケ内・宮ノ前	39204	040140	33° 36' 12"	133° 39' 37"	1995.1.9 ～ 1995.3.10 1995.7.24 ～ 1995.9.7 1995.11.6 ～ 1996.2.23	1,590㎡	学術調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
比江廃寺跡	寺院跡	古代	礎石建物 柵列跡 溝跡 土坑	2棟 1列 3条 2基	弥生土器 土師器 須恵器 瓦 土師質土器 緑釉陶器 黒色土器	塔跡は8世紀代以降に建立され、塔の北側には礎石建物が存在した可能性がある。 寺域の東限を区画した可能性のある溝跡が検出された。		
要約	<p>比江廃寺跡は、塔心礎が現存し昭和9年に「比江廃寺塔跡」として国の史跡となっている。これまで昭和44年、平成元年、平成2年に発掘調査が実施されたものの、伽藍配置など不明な点も多く、今後の史跡の保存措置を講ずるための基礎資料を得る目的で今回確認調査を実施した。</p> <p>塔心礎の再調査の結果、原位置を保っていることが改めて確認され、且つ、東側から掘り込み地業が検出され、それが南東側に広がっていることから塔心礎の搬入方向が推測できるようになった。さらに、版築土から8世紀代の須恵器が出土し、建立時期が白鳳期ではないことが判明した。</p> <p>塔心礎西部の調査では、北西側から2棟の礎石建物の壺地業跡が検出され、内1棟の礎石建物は東に展開する東西棟と考えられることから塔の北側に何らかの礎石建物が存在した可能性が出てきた。これにより、これまで法隆寺式と考えられてきた伽藍配置の再検討を促すこととなった。</p> <p>塔心礎東部の調査では、平成2年度の調査の溝跡との関連が考慮される10世紀前半に廃絶したとみられる溝跡が検出され、寺域の東限を画していた溝の可能性も考えられる。一連のものであれば南北75m以上、東西は塔心礎との位置関係から90m以内と推測される。</p>							

付 図

- X=66,612



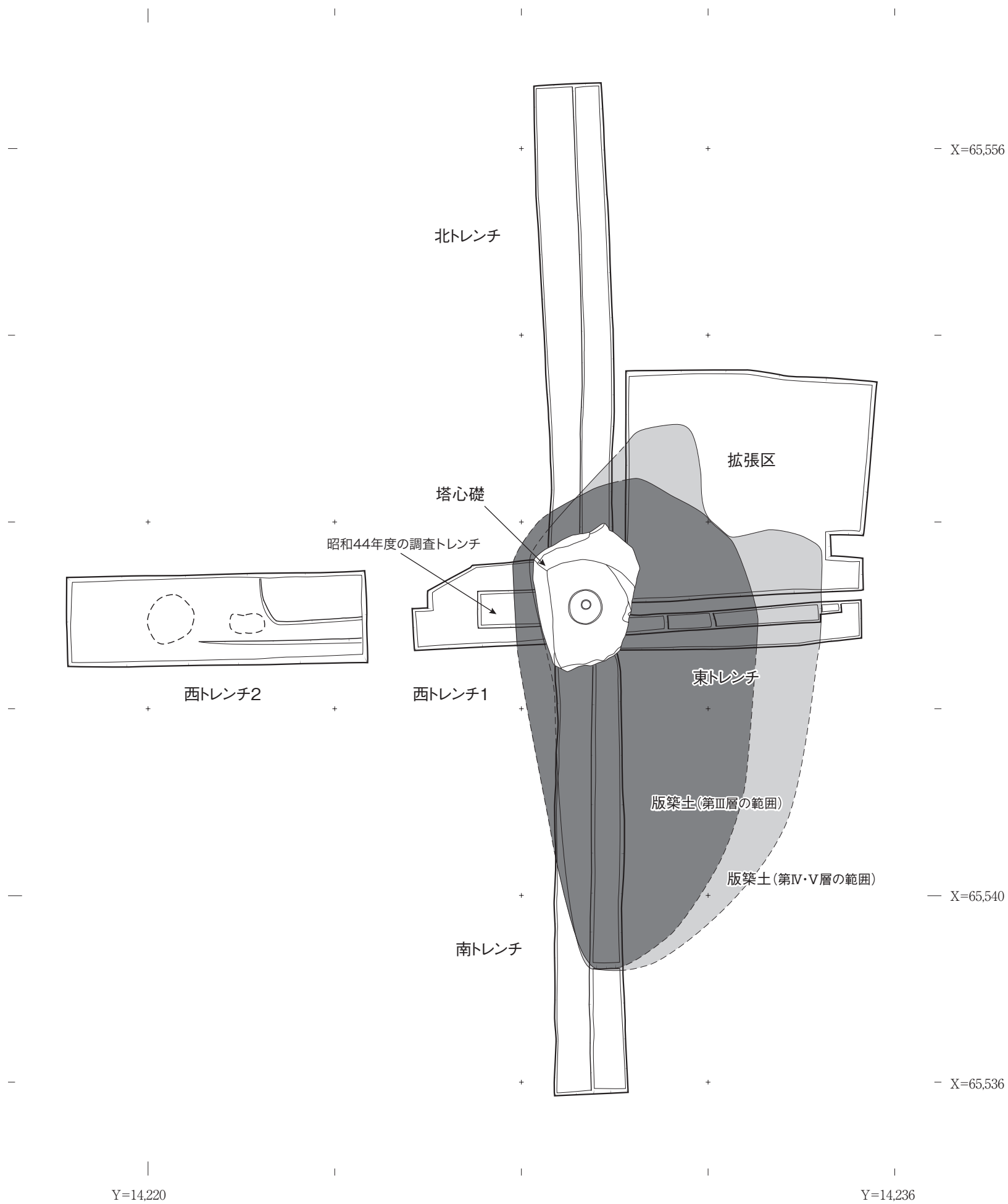
Y=14,248

Y=14,260

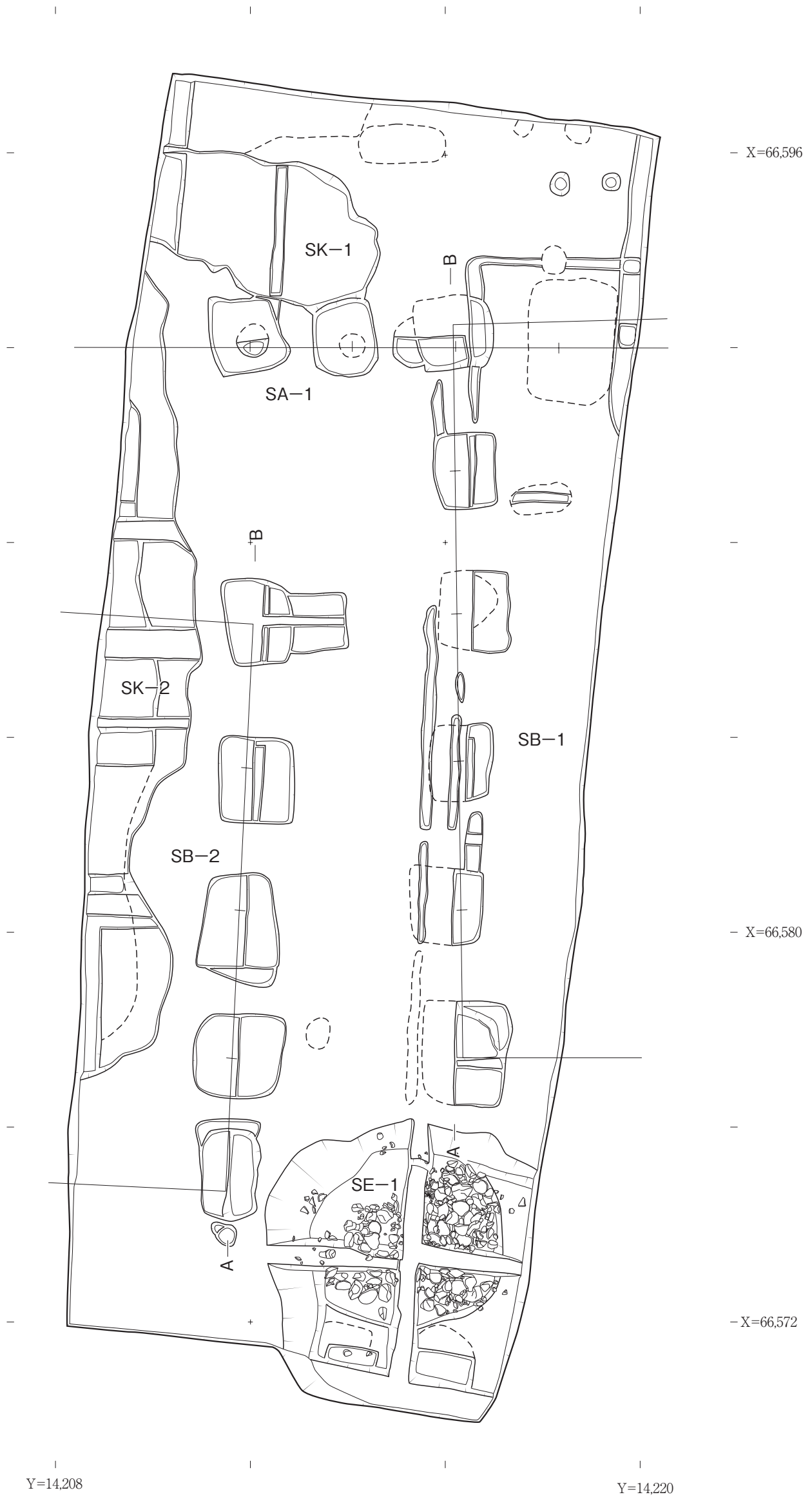
Y=14,268

- X=66,584

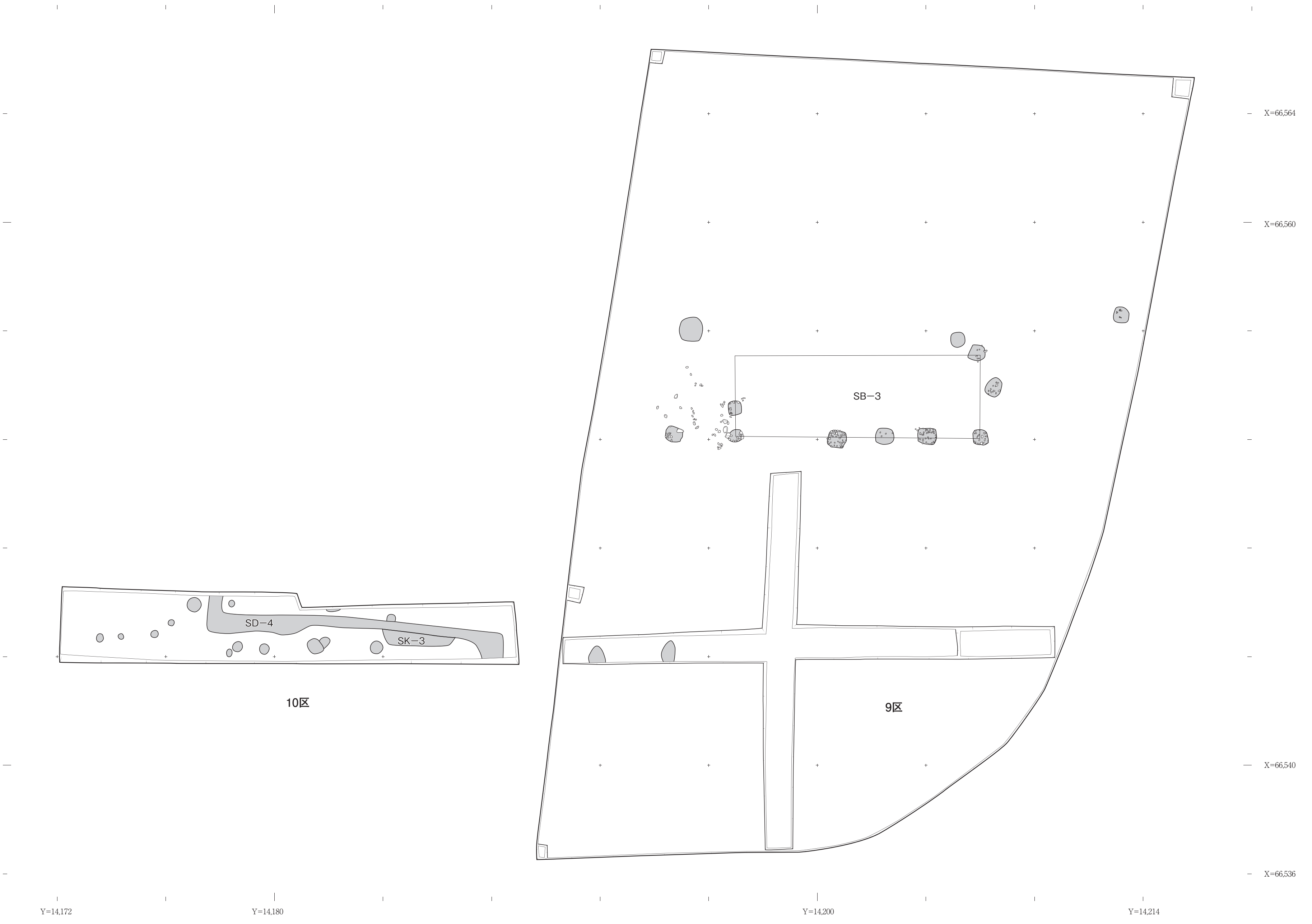
付図1 1区-2~4遺構平面図



付図2 7区(塔跡)遺構平面図



付図3 8区遺構平面図



付図4 9・10区検出遺構平面図

本書作成データ

ハード：PowerMacG5/2.0GHz DualCore, PowerBookG4/1.5GHz

システム：MacOS X (10.4.8)

ソフト：JeditX, Adobe Photoshop®9.0.2, Adobe Illustrator®12.0.1, Adobe Indesign®4.0.4

フォント：モリサワOTF, Times Italic, Century Old Style Std

プリンタ：XeroxDocuPrint C3530, EPSON LP - 8800C (原稿・図面・写真校正)

データ：すべてデジタルデータ

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第97集

比江廃寺跡Ⅲ

平成6・7年度の確認調査報告書

2007年2月23日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

